決定版
うお傳説
立教大助教授教え子殺人事件
作・山崎哲
第26回岸田國士戯曲賞受賞作品

ある開放病棟の昼前……、患者たちが中庭にたむろしている。
草をむしっている老人。
穴のなかに身を埋めてぼんやり空をみあげている若い男。
白い下着を干している男。
芝生に坐って週刊誌に目をとおしている看護婦。
それから小さな用水路のまわりをゆっくりと歩いている医師。
かれらはそこにいる。たださりげなくいる……、否、
かれらは頗る必死にさりげなくそこにいようとしているのである。
廊下の向こうからオルガンが流れている。
その音に誘われるかのように女がフラリはいってくる。

看護婦　こんにちは、芹さん。
老　人　こんにちは、芹さん。
女　……。（ベンチに座って赤い毛糸を編みはじめる）
医　師　さあ、みなさん、大きく胸をはって新鮮な空気をたっぷり頂きましょう。
老　人　みなさん……？
医　師　忘れるんです、堀口さん。なにもかも忘れて、あちらでツンツン草をむしりましょう。
若い男　先生……。
医　師　忘れるんですよ、埴生くん。なにもかも忘れて、淋しい金魚のようにお口をパクパクしましょうね。（女に）そう……、数えるんです、芹さん。毛糸の編み目だけを一生懸命数えなさい。そうすれば忘れることができますよ。なにもかも忘れてあれです、わたしたちはまるでここにはいないかのように振る舞うことができますよ。八城くん……？
看護婦　……。（見る）
医　師　は、そこに坐っている……。はい、いいですね、みなさん。うん……、いい。なかなかいい。いいなあ。それではわたしはちょいと町の八百屋さんへ……、いいなあ。ホントにいい。なんていいお天気なんだろう。ええ、いいですよ、みなさん。とても素敵ですよ……。

と立ち去る。
男、空っぽの洗濯籠を手に女のうしろ姿を見つめていたが、そっと震えて。

男　ここにいるよ、あや。ぼくはここにいるからね……。

なにかから逃れでもするように用水池のそばへ行き、洗濯をはじめる。
便りを読むかのように。

男　大っきいサンゴ、小っちゃいカンナ、お元気ですか？　とうさんたちも元気です。南の島の暮らしにはもう馴れましたか？　島の空気はあれだから葛飾区のごはんよりもおいしいでしょうね。おいしいということはなにはともあれ嬉しいことですね。とこ

ろで……。

女　あなた……。（かすかな声である）

男　ここだよ、あや……。

と小さく声をかけ、便りに戻る。

男　月日がすべるのは本当に早いものです。あの日……、お船が離れる竹芝桟橋では空っ風が目に染みて、デッキに縋りつくおまえたちの姿が涙の淵でふくらむシャボン玉のように見えたのに、いまはもう首筋に汗がねちねち……、風さえも木の枝でだらりんこうだっている、そんな季節になりました。指折り数えてみたらば、とうさんはこの病院で１８１枚の一日を食べちゃいました。この比喩わかりますか？　それはね、かあさんとここで過ごす一日いちにちをとても大切にしているということなのです。一日いちにちを大切にするとは、つまり戦うということなのです。ええ、とうさんはいま戦っています。戦いにトライしています。してますよ、ほんと、してんだから……！

（洗濯ものをぎゅっと絞って物干し竿にかける）ええ。こうやって瞼を閉じれば、四つ木の生なましい家庭のジジョウがいまも甦ってきます。爪に弾けた障子、畳にひっくり返ったインキ壺、台所の暗がりで新芽をふいているタマネギ、そこだけはいつもこじんまりとまとまったタマのお墓。そうして……、男の子のくせに、赤いスカートはいて台所と四畳半を疾駆するサンゴ。とうさんの意見を無視して、歯ブラシでひたすら虫歯を横磨きするカンナ。耳にこびりついて離れません。そうやっていつもおまえたちがうたった、抵抗の歌……。

声　家庭ノジジョウハヤメロ……。家庭ノジジョウハ飛ンデユケ……。家庭ノジジョウハ……。

と子供たちの声が聴こえてくる。

男　ありがとう、サンゴ。ありがとう、カンナ。とうさんは戦います。きっと立派に戦いぬいてみせます。だから……、いまは淋しい想いをさせてすまないが、おばあちゃんの脛かじって早すぎる人生の苦難を忍んでください。もうじきです。ええ、かあさんも良いのです。ぼちぼち快方に向っているのです。親子四人そろってじきにまた四つ木のお家に帰れるでしょう。いいえ、帰れます、帰れますとも。そうしたらば……、大っきいサンゴに小っちゃいカンナ、日曜日にはのり巻き弁当こしらえて堀切のショウブ園見にゆこうね。お隣りの金子さんちに負けない家庭のダンランしようよ……！

いささか照れくさくなったのだろう、竹竿で乱暴に池をひっかきまわす。

と、竿先に白いハイヒールが一個釣れる。

男　……？

女　あなた。

男　え……？

女　あなた。
男　ぼくか……？
女　あなたです。
男　なんだろう。
女　なんですか。
男　なにが？
女　なにがじゃありません。
男　あ、ごめんごめん。水が跳ねたんだね。謝まるよ、うん。そうだな、今度から気をつけてそっと静かにやります。しかしあれだね……、誰がこうもいろんなものを投げこむんだろうね、三日前に底ざらえしたばかりなのに。ほら、この白い靴なんかまだ十分履けるよ。誰だろう、もったいない……。（一度捨てるがすぐにまた慌てて拾う）
女　あなた。
男　……。
女　なにをしているんです。
男　この靴に見覚えがないかい。どうもあれだな、どこかで見たような気がするんだが……、おまえのか？
女　違います。
男　誰が履いていたのかなあ……。
女　そんな靴はどうだっていいんです。
男　うん……。
女　女の靴にこだわっているとあれですよ、いまにまた家庭のジジョウが始まってしまいますよ。そうしたらあたし責任もちかねます。
男　いま行きます、飛んでいきます。えい……！（と竹竿で池を跳びこえる）
女　……。
男　お、おい、見たか。（自分で驚いている）
女　なんです。
男　見たろ？
女　なにも見ません。
男　ぼくはいまこの池を跳びこしたよ。それもあれだ、ヒラリ蝶々のように……。できるもんだね、考えなければ。どうだい、もう一度跳んでみせようか。
女　……。（手の動きがとまる）
男　おい、どうしたんだい。
女　あたし情けなくてなんだか泣けます。
男　あれか、ぼくが池を跳びこすのは嫌か。
女　そうじゃありません。（手が動きはじめる）
男　そうか。いや、わかってる。きっとあれだろ、ぼくはみっともなかったんだ。その……、水溜りを跳ぶガマガエルみたいにみっともなかった。とてもみっともなかった。ただ、なんと言うか、あの池を軽がると跳んでみせればおまえが喜ぶんじゃないか。ぼくはそう思ったんだけど……、重たかった。すまなかった。うん、もうよすよ。無様はもうよします。（ぼそっと）自信あったのに……。

女　あなた。
男　ここにいるよ……。
女　いったい幾つになったのです。
男　なんだい藪から棒に、はは……。
女　まじめに訊いているんです。
男　そうだな、30……。
女　38歳にもおなりになってあれはなんですか。
男　だからもうよすよ。子供みたいに池を跳びこしたりはしません。
女　いいえ。38歳にもおなりになってニヤニヤするのはおやめ下さい。あたしはそう頼んでいるのです。
男　ぼくがニヤニヤをしていたって？
女　していました。
男　いつ？
女　さっきです、あそこに立って。
男　そうかな。
女　そうです。
男　あれはニコニコのつもりだったのに……。
女　いいえ、ニヤニヤです。間違いありません。いいですか、ニコニコというのはこうです……。（無表情な微笑である）でも、あなたのは……。（まったく同じ微笑である）これがニコニコでしょうか。
男　さあ……。
女　さあはいいんです。もっとよくごらんになって、目尻の下品な感情を鋭く読みとってほしいの……。（とまた笑ってみせ）さあ、これのいったいどこがニコニコと言えるんでしょう。
男　もういいよ。
女　よかないんです。
男　坐ってもいいか？
女　いいえ、背筋をたててお聞きになって下さい。
男　……。（不安になる）
女　いいですか。気違いはあたしであってあなたではないのです。気違いでもないあなたがです、女学生の手のひらに乗っかったコンニャクみたいにヤニ下ってです、ぶつぶつ仏前でお経をあげるかのようにひとり呟いててごらんなさい。事情を知らない人は……、あそこの旦那さま、ちょいとおかしいんじゃございませんこと、お脳が？　まあ、奥様ったら、おホホホホ……！　世間では誰だってそううわさします。うわさをもとめて目を光らせているのが世間というものなんです。あたし、そんなの嫌……！嫌です。気違いはあたしひとりでたくさん。ほんとうにたくさんですからね。そうでしょう……？（うっすらと涙すら浮かんでいる）
男　はい。
女　あなたはあたしの付添人なんです。あたしはあなたしか頼るもとがないんです。いまさら故郷の島へ帰るわけにもまいりません。そんなふうにあたしは可哀想なんですか

ら、もうすこししっかりして下さい。
男　しっかりします。
女　38歳の品性というものをもってください。
男　はい、品性をもちます。
女　ほんとうにそうしてくださいね。
男　約束します。ニヤニヤももうしません。
女　あら……？（と手をとめ）あなた、なにかニヤニヤしていたの？
男　……。（困惑する）
女　……。（不意にあらぬ方を見やる）
男　坐っていいかい、あや。
女　……。
男　坐りますよ。
女　……。
男　坐ったからね。
女　……。
男　あや。（女の肩に手をかける）
女　なあに？
男　ぼくはここにいるよ。
女　あたしは盲じゃありませんから……。
男　うん。ぼくだってあれだよ、なにもそんなつもりで言ったんじゃないんだ。ただ、その……、おまえがこんなふうになってしまったのはやはりぼくの責任だからね。その責任だけはきちんと取らなくてはいけない。ぼくだってあれだからね、38歳だからね。その……、戦国時代にたとえるならば一国一城の主と言ってもいい。そうだろう？　だから、その……、いつまでも許されていいというものじゃない。うん、ぼくだってほんとうはうんざりなんだ。いや、おまえにじゃないよ。その……、つまり、許されるってことにだよ。だってあれだからね。ぼくが気づいた時にはもう許されるぼくがいて、それからはなんと言うか……、ずうっと許されっぱなしだからね。いや、むろんあれだよ。なにも責任をとるためにだけおまえのそばにいるんじゃないよ。ぼくはおまえといたいからいる……。それはそうなんだ。信じてくれるだろう？　しかし……、そっちの気持ちとは別個にだね、こっちの気持ちとしてはやはりなんと言うか……、責任をとりたい。そういう欲望もグイグイ……、鎌首もたげてくるんだなあ……。（堪らず背中を掻きむしる）
女　あなた……。
男　お、おい。ちょっと背中ひっかいてくれ。
女　……。（従う）
男　上、もうすこし上……。うん、そこ。そこでいいからあれだ、強く……。もっと強く……。（すこし落ちつき）近頃どうも変なんだ。そこ、やたら痒くって。夏が近づいて虫がふえたせいかしら。
女　ねえ、あなた。
男　ん……？

女　いま黒い猫がいまして？
男　どこに？
女　あっちの植え込みのほう。
男　いないよ。
女　そう……。
男　気のせいじゃないか。
女　気のせいかしら……。
男　気のせいだよ。病院では動物を飼っちゃいけない規則だし、それにあれだろう。どんな野良猫だってあの高い塀をのりこえるのはムリだろう？　だから気のせいなんだ。
女　（嬉しそうに）タマならできました。
男　タマなら……、ね。
女　いつだったかしら。うちのお庭から金子さんちの屋根にひょいと飛びのったんですよ。
男　ありがとう。
女　もういいんですか……？（恥じて手をひっこめる）
男　手伝おうか。
女　手伝ってくださるの？
男　うん、手伝うよ。
女　嬉しいわ。
男　……。（毛糸の束を両手首に）
女　（毛糸を球状に巻きはじめる）あなた……。
男　ん……？
女　いいお天気ね。
男　うん、いいお天気だ……。

若い男が穴の中からゆっくり首をもたげ、ぼそぼそと喋りはじめる。

若い男　お魚が泳いでいる……。遥かなユーフラテスの川底を二匹のお魚がゆらゆらと泳いでいる。のんびり泳いでいる。そのお魚たちはアタマでは考えない。アタマとは逆さまの方向から考える。つまり……、尻尾で考える。なぜそんな芸当ができるのか？　それはお魚たちが水に深く抱かれているからなのです。ぼくは……、まだお魚になれません。銀のウロコはもう手の届くところにあるのに、お魚はあんなに遠い。ぼくもはやくお魚になって、ユーフラテスの川底でのんびりしたいのに……。ヘソ以下で考えることができないばかりに……。（泣いている）
男　……。（若い男を覗いている）
女　あなた。
男　ん……？
女　埴生さんに失礼ですよ。
男　あ……。

男、看護婦の視線にぶつかっていささか気まずい思いである。

医師がキャベツを喰い散らかしながら現れる。

医　師　八城くん、八城くんてばあ。
看護婦　なんでしょう。
老　人　（洗濯ものの陰からでてきて）わたしもここにいます。
医　師　あなたはいいんです。あなたはそっちでペンペン草むしっていればいいんです。
老　人　ふうん……。
医　師　八城くん、わたしはいま９８０円のバカ高いキャベツをばりばり齧ってるんですが、君はなにしてるんですか。
看護婦　ごらんの通りですわ。
医　師　え？　君はいま露わにオナニーしてるんですか。
看護婦　いいえ、週刊誌を読んでいるんです。
医　師　なんだ、びっくりするじゃありませんか。わたしはまたあれです。君はいま痰壺のなかで気絶してるんじゃないか、そう思ってヒヤヒヤしました。
看護婦　先生にはここが痰壺に見えて？
医　師　痰壺ならまだいい。時どき十条のストリップ小屋にみえてきて、みなさんと乱交したくなって困ります。何頁をおっぴろげてるんですか。
看護婦　うさぎさんページ。
医　師　うさぎさんには醜い亀さんが乗っかってるんですか。
看護婦　うわさの森進一です。
医　師　あ、森くん好きですか。
看護婦　先生は？
医　師　好きです、森ちゃん。彼のくちびるには、豚ヒレが炭火のうえでひんめくれていくような滅びの憂いがあります。それにあれです。糸鋸ひくようなあのダミ声にはのど仏で人生の不幸がひきつっている……、そういった趣きが溢れていてたまらないんです。が、君はいま勤務中ではないのですか？
看護婦　そうですわ。
医　師　どうなんだろう？
看護婦　さあ……。
医　師　それはわたしだってあれです、キャベツを齧っている。ビタミンＣを豊富にとろう。そう考えて齧っています。人間ビタミンＣさえとっていれば間違いありません。だいたい生きていけます、幸も不幸もなく生きていけます。ところがです。このキャベツ一個に含まれるビタミンＣは、驚くことなかれ愛媛ミカン一個ぶんにも及ばない。愛媛ミカン……！（天井からぽとりとミカンが降ってくる）それにこの愛媛ミカンの値段がです、一個せいぜい30円だってのにこのキャベツときたら９８０円……、９８０円もしたんだ！　あ、いや、わたしはなにも９８０円に怒ってるんじゃないんです。一日が９８０円であれです、過不足なく生きてゆけるならとても安い。ピーコックより安い。そう考えるんです。その……、問題はです。このわたしが大のキャベツ嫌いで、大の愛媛ミカン好きだってことなんです。ええ、嫌いです。キャベツと聞くだけで吐き気がする。ペッ！　そんなわたしがですよ、ビタミンＣを求めて八百屋の前に

立ってごらんなさい。愛くるしくもにぎやかに着飾った愛媛ミカンの山盛りに、からだ全体がこう……、ドドッとつんのめりそうになる。それが人情というものです。しかし、しかしです、八城くん。愛媛の人情が襲ってくる、ドドッと襲ってくる。来るぞ来るぞ、ほら来た！　そうした次の瞬間、わたしは店内をすばやく見渡して、土に汚れた葉っぱの塊りを目尻のこのへんでキャッチするんです。キャッチして愛媛につんのめりそうだった足をこう……、千葉方面の畑に踏みだすと裂けるんです。股がふたつに裂けてこう……、わたしはズブズブ沼の深みにはまっていく。そんな時なぜかわたしはいつも叫びたくなるんです。ここは愛媛の段々畑でも千葉方面のビニールハウスでもない。ゴルゴダの丘だったんだ！　すると、右目で買物客に愛想バラまき左目でおつりチョロまかしている八百屋のおかみさんが、なにやら聖母マリアの末裔にみえてきて胸がこう……、電子レンジのホットドッグになってくるんであれです。結果的にいつもわたしはこうやってキャベツを齧っている。齧ってはいるんですが……、勤務中の看護婦さんがですよ。女性週刊誌の淫らなうわさに心なぶられて、お陽さまに股倉ポッカポッカ暖っためてもらっている。そんなことが許されていいのかね、そんなウットリが！

看護婦　先生……。（股間を握る）

医　師　ア痛……。

看護婦　先生のおっしゃりたいのはそんなことだったんですか。そんなことがおっしゃりたいためにわざわざ９５２字もお使いになったんですか。

医　師　わたしはシンチョウな人間なのでつい……。

看護婦　いいですか。わたくしはいつだってきちんと仕事をしています。そうです、先生に教えていただいたようにです。みなさんを見ています、黙って見ています。その一挙手一投足をです。でも黙ってニコニコ見ているというのはあれです……、とてもむつかしいんです。先生もおっしゃいました、みなさんに見張っているように思われたらお終いだって。

医　師　するとその週刊誌は？

看護婦　ただのカモフラージュですわ。

医　師　そうだったのか……。嬉しい。わたしはとても嬉しい。君はあれですね、けっして森くんに気があったわけじゃないんですね？　嬉しい、八城くん。わたしはとても嬉しい。お尻触っていい？

看護婦、伸びてくる手をひっぱたく。

老　人　アウアウ……、ア。（あくびする）

医　師　あれ？

老　人　あれ？

医　師　あなた、まだそこにいたの。

老　人　わたし、ここにいますか？

医　師　（触れて）形としてはいます。

老　人　なんだかボーッとして、いるんだかいないんだか。

医師　どうしたんです。
老人　その……、暇すぎるんです。
医師　だからあれです、あなたはあっちで草むしっていればいいんです。それがあなたの精神衛生なんです。それであなたは恢復するんです。
老人　わたしは恢復するでしょうか。
医師　もちろん恢復しますよ、いつかパッと桜が咲くみたいに。
老人　恢復、しますよね？
医師　恢復、するんじゃない？
老人　でも……。
医師　なんです。
老人　草、もうないんです。
医師　草、もうないんですか。
老人　ないです、あっちの草。
医師　こっちの草は？
老人　ない。
医師　全然？
老人　あっちもこっちもつるっ禿。
医師　じゃ、さっそくあした植木屋さんから取り寄せましょう。
老人　あしたですか。
医師　来年になるかもしれません。
老人　なぜ来年になるんです。
医師　植木屋さんの都合だってあるでしょう？
老人　わたしの都合はどうなるんです。
医師　なにか不都合でも？
老人　わたしは一刻もはやく恢復したい。
医師　わたしだって恢復させたい。
老人　だから草ください。
医師　これはわたしの草です。
老人　く、く、草が欲しい。すぐ欲しい。むしょうにむしりたい。草……！（手が震えている）
医師　これ、わたしの草だけどいいですよ、一枚だけあげましょう。（キャベツの葉を一枚やる）
老人　（それをむしりながら）わかってください。
医師　わかります。
老人　わたしは恢復したい。
医師　もちろん恢復しますよ、いつかパッと桜が咲くみたいに。
老人　ほんとうに恢復するでしょうか。
医師　信じるんです。
老人　先生を？
医師　わたしではありません。ご自分でご自分をです。ええ、世間のひとはいつもそうして

います。自分で病んでいつも自分で治している。それはあれです。世間のひとがどこかで自分というものを深く信じているからなんです。

二人、急に下卑た笑いをくり返すが。

老　人　草むしっていると信じられるんです。
医　師　この草もう一枚あげましょう。
老　人　（払って）その草がもうないんです。
医　師　草、もうないんですか。
老　人　ないです、あっちの草。
医　師　こっちの草は？
老　人　ない。
医　師　全然？
老　人　あっちもこっちもつるっ禿。
医　師　そうか、それでだったのか。
老　人　あしたですか。（手が震えている）
医　師　近頃、植木屋さんの頬が変にゆるんでいると思いました。
老　人　（手に）お尻ひっぱるなよ、おまえ。
医　師　え……？
老　人　なぜ来年になるんです。わたしの都合はどうなるんです。わたしは一刻もはやく恢復したい。だから草ください。く、く、草が欲しい。すぐ欲しい。むしょうにむしりたい。草……！
医　師　どうしたんです、堀口さん。
老　人　草！（キャベツに襲いかかる）
医　師　なにをするんです。これはわたしんです、９８０円もしたんです。あなた、あれですか。きょうのわたしの過不足ない一日をハチャメチャにするつもりですか！

看護婦、立ちあがって軍艦マーチを歌いはじめる。
と、老人、急にニコニコする。

老　人　本日ハ晴朗ナレド波高シ、シュッシュッ。右舷前方ニ敵機ライシュウ、距離オヨソ三千、ババーン……。本日ハ晴朗ナレド波高シ、シュッシュッ、シュッシュッ……。
医　師　（看護婦のくちを塞いで）堀口さん。
老　人　あ……、わたしを責めんでください
医　師　責めてたまるか！
看護婦　先生。
医　師　わかっています。わたしは冷静です、冷静ですとも。その、あれですから……、誰がなんと言おうとわたしは医者ですから。しかし悔しい。空しい。その、あれですから……、医者だって人間ですから。草がない、堀口さん？　草がなければです、むしった草を拾ってまた植えればいいじゃありませんか。植えてむしって拾ってまた植える。

30年も草むしり一筋に生きてきて、そんな単純なことがわからないんですか。わたしはなにも実利的な作業を要求してるんじゃないんですよ。それが……、わたしはなんと言うか、悔しい。空しい。

老人　わたしじゃない、草を欲しがってるのは。この手なんです。（手に）おい、謝れ。先生に謝れ。すみません、すみませんて謝れ。（医師に）すみません、いまわたしが謝らせますから。わたしを責めんでください。責められると、電気ショックに責められるとわたしは……、痛い。さいなら。

すっと物干し台の陰に隠れる。

女　（手の動きをとめ）あなた。

男　ん……？

女　先生、泣いているんじゃありません？

男　そうか。

女　泣いているんです。だってのど仏が震えていますよ。

男　そうかな。

女　やっぱり泣いているんです。看護婦さん。

看護婦　なんでしょう。

女　先生、泣いていますよ。

看護婦　なんでもないんです。

女　でも泣いています。お可哀想に……。

看護婦　ほんとうになんでもないんです。ご心配いりませんからどうぞそのまま編みものをつづけてください。（ゆっくり空をみあげ）きょうはほんとうによいお天気ですね。

女　……。

看護婦　さあ、参りましょう、先生。

医師、突然、金属音のような笑いを発して立ち去る。

女　（空を凝視している）ねえ、あなた。

男　なんだ。

女　そんなことってありますか、なんでもないのに泣くってことが。

男　……。

女　あたしはありません。泣くときはなにかがあって悲しいから泣くんです。あたしは嫌いです、あの看護婦さん……。

男　いい人じゃないか。

女　あたしも初めはそう思いました、いい人だなって……。けど、あの時からあたしに冷たいんです。あたしを根にもっているようなんです。

男　そうかな。

女　そうです。看護婦さんの仕事が大変だってことはわかります。感謝もします。けど……、あの時は仕方がなかったんです。あたしは病気の真っ最中だったんです。だから

ベッドにおしっこ漏らしたんです。あたしが漏らしたくて漏らしたんではありません。
それなのに根にもっている。シーツを洗ってもらったわけでもないのに、シーツを洗ったのはあなたでしたのに……。恥ずかしい想いをしたのは……。（指で目尻を拭う）
男　……。（落ちつかない）
女　あら、どうしたの、あなた？　くねくねなさったりして。
男　また痒いんだよ、背中が。
女　キンカン買っておけばいいのに……。（掻いてやる）
男　うん……。合わないのかな、このパジャマ。
女　あら、似合いますよ、このパジャマ。
男　そうじゃなくて……。
女　なんです？
男　綿にすべきだったかな、１００％の。
女　パジャマは綿に限るんです。からだに馴染むんです。それでなくともあれです、あなたはアレルギー体質なんですから……。
男　ありがとう。
女　キンカン買っておくんですよ。
男　うん。
女　……。（再び毛糸を編みはじめる）
男　ねえ、あや。
女　なあに？
男　ぼくはさっき考えたんだが、その……、あれだ。ここを退院して四つ木の家に帰れたら、ぼくはまずおまえたちを連れて堀切のショウブ園にでかけようと思うんだ。
女　嬉しいわ。
男　そうか。
女　カンナやサンゴもきっと喜びますよ。だってあれですもの……、四つ木のお家から歩いたって10分もかからないのに、あたしたちまだ一度も足を運んだことがないんですもの。
男　いまにして思うと不思議だね。
女　ええ、不思議な家庭でした。
男　いや、そういうあれじゃなくて……。
女　そうじゃないんですか？
男　その……、不思議は不思議なんだが、なんて言うか……、四つ木に住んでいる頃は思いもしなかったろう。堀切のショウブ園がすぐそこにあって、五月ともなれば黄色い花が湖水一面に咲き乱れている……。
女　そうですね。
男　あれだね、四つ木町の盲点だったね。
女　あら？（手の動きがとまる）
男　……。（ドキリとする）
女　あたし、言いませんでしたか？
男　そうか？

女　言いましたよ、言いました。本郷から四つ木に引っ越してきた時……、あなた、堀ショウブ園はすぐこの近くですよ。たしかにそう言いました。
男　そうだったかな……。（後悔している）
女　そうですよ。

看護婦が現れてじっと成り行きを見守っている。

女　だって、あたし、引っ越しの前の日に東京都の区分地図を買ったんです。あの時、あなたは仙台に出張中でしたからあれです、あたしが車の道順を調べなければいけなかったんです。
男　タクシー拾えば……。
女　だからタクシー拾いましたよ、子供たちと。でも……、（編み棒をもつ手が震えてくる）あたし嫌なんです。あたしが道順を知らないばかりに、タクシーが変に遠まわりしているんじゃないか、そうギシンアンキするのは。運転手さんにもとても失礼だし、第一あれです……、ギシンアンキしながらカシャカシャ音をたててあがるメーターと睨めっこする、そんな自分が不愉快で嫌なんです。だから地図を買って道順をおぼえようとしたんです。で、偶然みつけました。あの有名な堀切ショウブ園が新居のすぐそばにある……。ええ、思いだしました。あの地図帳のうえに赤鉛筆のシルシがあるはずです。あたし一度は行ってみたいなあ……、そう思ってシルシをつけておいたんです。ね、誰だってそうするでしょう？　だから言いました。きっと言いました。あたし、あなたには包み隠さずなんでもお話ししてきたでしょう？
男　うん……。
看護婦　（小さく）がんばるんです、芹さん。あたくしにはどうしようもないんです。だから踏んばるんです。踏んばってください、芹さん……。
男　その、おまえはいつもぼくに正直だった。だからぼくもたぶん……。
女　たぶん？（編み棒で自分の手を突く）
男　あや……！
女　これがたぶんですか。たぶんでどうしてこんなことになるんですか。あの時、あなたとまっすぐショウブ園に行ってたら、あたしアタマが……、アタマが……、アタマが……！　ぶって、ケイジ。あたしのアタマぶって、ケイジ。ぶって……！
男　たぶんは取り消します！　ぼくは聞いたような気がする。いいえ、聞きました。絶対です、これはもう絶対です。しかし忘れていた。このアタマが完全に忘れていた。ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさいごめんなさい……！

男、自分のアタマを執拗に地面にうちすえる。
女、その姿を凝視しているうちに昂ぶりが薄れてきて。

女　お願いです、あなた。手をあげてくださいな。
男　信じてくれますか。
女　信じます。あたし、いまあなたを信じています。

男　ありがとう、あや。ぼくは改心したんだ。改心して……、いまはおまえのために一生懸命努力している。
女　ありがとう、あなた。
男　いや、ぼくの方こそありがとう、おまえ……。（女の手を握りしめる）
女　いけません、こんな所で……。
男　いいんだよ。ぼくたちはあれなんだから、夫婦なんだからね……。（抱き寄せようとする）
女　あなた。

若い男が穴から首をつきだしてじっと見ていたのだ。

女　こんにちは、埴生さん。
若い男　……。
女　またお魚とお話をしていたんですか。
若い男　ぼくに話しかけないでください。ぼくはまっぴらなんだ、愛されるなんて……。

と、ゆっくり立ち去る。看護婦の姿ももう見えない。

女　ほら、あの人を怒らせてしまったじゃありませんか。
男　見えないなあ……。
女　なあに？
男　だから、その……、魚だよ。
女　あなた、ここは海の底じゃないんですよ。（なぜかニッと笑う）
男　うん……。（同じようにニッと笑う）
女　……。（毛糸を編みはじめる）
男　ああ、きょうはとても気持ちがいい。なんだかのびのびだよ。
女　あたしもです。あなたといろいろお話ができたし、それにとってもお天気がいいし……。ね、うるさくない？
男　波の音が？
女　あのオルガン……。

そういえばこのオルガンの音を忘れてはいけない。

男　娯楽室で誰か弾いているんだね。
女　朝からもう三時間もです。きのうまでは誰も弾かなかったのに……。
男　新しい患者さんでも来たんだろう。
女　あたし、あの音を聞いているとからだがイライラしてきて編みものがちっとも進みません。
男　ぼくが頼んでこようか。
女　ええ、そうして下さい。あたし、きょうは一日中のびのびと過ごしたいんです。お天

男　気もこんなにいいんだし……。
男　うん、行ってくるよ。いいね？
女　ええ……。
男　じきに帰ってくるよ。その……、あれだからね。頼んでくるだけだからそんなに時間はかからないと思う。
女　ええ……。
男　あれだから……。
女　はやく行きなさいよ、あなた。
男　行ってきます。（途中で引き返してくる）おまえ……。
女　なあに？
男　あれあったかな。
女　カミソリでしたら机の抽斗ですよ。
男　シェービングは？
女　化粧品箱のなかじゃないかしら。
男　弱ったなあ。
女　古いのはもうお使いになったの？
男　うん。弱ったよ。
女　ひねりだせばなんとか残っているんじゃありません？
男　それがあれで、今朝ゴミに捨てちまって……、弱った。石鹸じゃカミソリ負けしちまうからね。
女　あら？（顔をあげて）あなた、ヒゲをお剃りになるの？
男　剃りますよ、背広に着替えるから。
女　どこかお出かけになるんですか。
男　出かけますよ。
女　そこの娯楽室に行くんじゃなかったんですか。
男　だからそこの娯楽室ですよ。
女　そのままでいいじゃありませんか。
男　このままで？
女　いいんですよ、その制服で。
男　制服たって、その……、ただのパジャマだからね。
女　わかっているのですか、あなた。
男　なにが？
女　あなたはこれから立教大学の助教授として娯楽室に行くんじゃないんです。妻であるあたしの代理人として行くんです。夫として行く……。だからいいんですよ、その制服で。
男　しかし、その……、少しくつろぎ過ぎてないか？
女　娯楽室はもともとくつろぐべき所です。
男　そうだね。いいよね。
女　いいんですよ……。（編みものに戻っている）
男　うん。行ってきます。

女　あなた……。（と呟く）
男　なんだい？
女　え？
男　だから……。
女　いいえ、なんでもないわ。ボタンがはずれてますよ。
男　あ……。（ズボンのボタンを填める）
女　はやく帰っていらしてね。
男　うん……。（忘れ物をようやく思いだしたかのように用水池へ近づき、白いハイヒールを手にする）
女　あなた……。
男　……。（聴こえていない）

物干し台の陰から老人がスッと出る。

老人　芹さん。
男　あ……。（ハイヒールを隠し）こんにちは、堀口さん。
老人　奥さんあれですな、具合いいようですな。
男　ま、ぼちぼちです。
老人　それはいい。こういう病気はぼちぼちがいい。安心だなあ。パッと恢復した人はパッと再発してここへ戻ってきます。だからぼちぼちがいい。統計的にいい。ぼちぼち恢復して退院した人はほとんど帰ってきません。つまり、恢復しっぱなしだなあ。それはいい、だいたいいい、いいなあ。ちょっとお話があるんです。
男　いまでなくてはいけませんか。
老人　お手間はとらせません。（手に）じっとしてろよ、おまえ。（男に）奥さん、呼んでますよ。
女　あなた……。
男　なんだい。
女　ほんとうに猫いませんか……。（と呟いている）
老人　猫、いません。
男　その……、家内に使いを頼まれているんですが。
老人　3分でいいんです。きっかり3分わたしに下さい。あれでしたらここに時計がありますから計ってくだすっても構いません。3分きっかりで終わってみせますから。（手に）黙ってろ、いまわたしが喋ってんだから。（男に）奥さん、呼んでる。
女　あなた……。
老人　はい、いま行きますから。
女　行ったの、あなた……。（と呟いている）
男　で、なんでしょう。
老人　はい？
男　その……、つまり、お話です。
老人　そうです。つまり、お話ですが……、（時計をチラリ見て）今度の日曜日にレクレーシ

ョンやるんです、この中庭で。
男　ええ、伺っております。
老人　そのレクレーションの内容があれです、今朝の患者代表委員会で決定しました。
男　そうですか。
老人　そうです。なんでしょう。
男　さあ……。
老人　さあ、はやく！
男　またダンスパーティでも……。
老人　ダンスがお好きなんですか？
男　ぼくはとてもだめです、足がもつれちゃって……。
老人　足がもつれて絡まっちゃう。そこにダンスの根強い人気の秘密があるんじゃないんですか？
男　ダンスなんですか？
老人　ダンスじゃないんです。さあ、はやく！
男　なんだろう？
老人　見当つきませんか。
男　さあ……。
老人　ケントウつけて下さいよ。
男　なんだろう。なんでしょう？
老人　拳闘です。
男　は？
老人　歯が抜けたんですか？
男　いえ、あの……、ケントウというのは？
老人　アメ公流に言うならばボクシングです。
男　患者さんのレクレーションにあれですか、ボクシング呼ぶのですか。
老人　芹さん、反対ですか？　教授としての知性が許さんですか？
男　いえ、そういうあれじゃないんですが、しかしボクシングというのは……。
老人　（手が地面を烈しく殴って）暴れるな、ピストン！
男　どうしました？
老人　適性語はやめてくれませんか。こいつがすぐムキになって踊り始めるんです。
男　わかりました。しかし拳闘というのはどうでしょう。いえ、その……、ぼくは家内の付添人だからなにか言える立場ではないんですが、拳闘はいささかあれじゃないでしょうか。
老人　そういう意見はあれですな。
男　あれですか……。
老人　体制的ですよ。
男　やはり体制的ですか……。
老人　反体制で行かなくちゃ、芹さん若いんだから。
男　もう若くもないんですが……。
老人　いや、誤解しないでください。その……、それはこいつの意見なんです。（手に）おい、

おまえ喋るか？　喋りたかったら喋っていいんだぞ。喋ってみろ。おい、喋ってみろ！

男　（手が隠れる）すいません。こいつ、あなたとは顔を合わせたくないそうです。

老人　どうも……。（ハイヒールに気をとられている）

女　拳闘というのはまあ確かに残酷なレクレーションです。しかし、この病気の治療というのはあれでしょう。わたしは戦うんだ、戦うぞお。そういった意欲をですね……。

（手の動きをとめ）あなた、ほんとうに猫いない……？　あたし、どうもあれです。そのへんにタマが来ているような気がするんです……。

と言ってベンチからフラリと立ちあがり、ぼんやり立ち去る。

男　あや。

老人　芹さん、聞いてるんですか。

男　はい。で、どなたがボクシングを……、いえ、拳闘をやるんです。

老人　あなたやりますか？

男　ぼくはだめです、その……、臆病ですから。

老人　しかし委員会で決定してしまったんです。わたしとあなたが殴り合うんです。

男　それはムチャですよ。

老人　（時計を覗いて）あっ、もう3分経ってる。3分28秒が過ぎようとしてる。あ、過ぎた……。わたしのカンではまだ3分に28秒は余ってるのに。困るなあ。困りますよ、芹さん、この56秒のズレは……。

男　その、拳闘の件ですが……。

老人　だから困るんです、わたしにそういうお話をされても。約束の3分間はとっくに過ぎて38秒……、いや、50秒を過ぎているんです。この、あの……、時間がズレればズレるほどあれなんです、わたしはどんどん遠ざかっていくんです。わたし自身から遠ざかっていく……。ああ、わたしはいったいどこへいくんだろう？　芹さん、困りますな。芹さん、さいなら……。

と後退りしながら消えた。

男、かすかに吐息をつき、それからゆっくりと廊下へ向かう。

女が戻ってくる。

女　あなた、いないの……？　あなた……？　いないのね、行っちゃったんですね。行っちゃったわ。あなた、とうとう行っちゃった……。内緒で行っちゃった……。

ベンチに坐って編みものを始めようと毛糸をたぐるが、その玉がないのに気づく。

若い男が拾った毛糸の玉をぼんやり眺めながら現れる。

女　あ……。

若い男　あ、またアタマで考えてる……。

女　ありがとう、埴生さん。

若い男　え……？
女　それ、あたしのですの。ついうっかりして落としてしまったんですよ。
若い男　……。（毛糸を辿ってみると確かに女に繋がっている）
女　……。（ぎこちなく笑う）
若い男　あなたのですか。
女　ええ。よろしいんですよ、あたし自分で巻きとりますから。（近づく）
若い男　……。（逃げる）
女　すみません、返していただけません？
若い男　待ってください。すこし……、その、ほんのすこしでいまなにか大事なことがわかりそうなんです。
女　大事なことって？
若い男　なにかです。なにかとても大事なこと……。
女　そうですか。（ベンチに戻って手を動かし始める）
若い男　いいぞお。見えてきた、ぼんやり、もやもやあっと……。うん、順調だ。ぼくはいま少なくともヘソあたりで考えている……。（毛糸の玉をいじっている）
女　わかります。あれですわ、なにかとても大事なことを思いだそうとする時はたいていそうですわ。そこにじっと立ちどまって、あれこれアタマの中で考えてみてもだめなんです。手足を動かすんです。その……、お散歩をしたり、戸棚の食器をちょっとずらしてみたり……。その方がひょいと思いだしたりするものですわ。あれはどうしてなんでしょうね。そのことについてあたしいつか考えてみました。そうして思ったんです。手足を一生懸命動かしていると、アタマの中が空っぽになるからいいんじゃないかしら。空っぽの向こう側からいつかの忘れものが、ピョコンと鎌首もたげてくるんじゃないかしら。それが人間の仕組みじゃないのかしら……？　だからあたしこうも思うんです。男の方はよく主婦々々ってバカになさいますが、一生懸命オシメを洗濯している主婦の心はなにに渦巻かれているものやら知れたものじゃない……。ええ、そうですわ。気になさらずにその糸をどうぞ使ってくださいな。
若い男　すこし黙っててくれませんか。
女　あたし、いけない女ですわね、あなたのお考えの邪魔をしたりして。ごめんなさい。でも……、なにもしないで黙っているとわたし恐いのです。いいえ、そうじゃないんです。あなたが恐いというあれじゃないんです。そうですね、なんて言ったらいいんでしょう。自分で自分がとても恐いんです。だからあたしお喋りなんです。その……、できるかぎりお喋りに努めようとしているんです。でもお喋りは……、つらい。その毛糸返していただけません？
看護婦　……。（現れて遠まきに見ている）
女　あたし、お喋りをしない時はこうやって編みものをするんです。ええ、先生にもそう言われているんですよ、一メ一メ数えながら編むようにって……。そうして、きょうは全部で何メ編めたか後で先生に報告するんですわ。正直に言うとあたしも初めはバカらしいと思いました。だってそうでしょう？　先生はただいつもニコニコ笑って……、そうですか、きょうはそんなに編めましたか、偉い、芹さんは偉い……、そうおっしゃるだけなんです。だからあたしいつか先生にお尋ねしたんですの、こんな治療

にいったいなんの意味があるのですかって……。あたしほんとうにそう思ったんです、こんな治療にいったいなんの意味があるのかって。そうしたらあたし怒られたんですよ。（手が乱れている）意味はない、無意味です、無意味に耐えなさい。いいえ、無意味であることの喜びをかみしめなさい。そうすればあなたは癒る！　ホホホホホ……、そのオルガン止して頂けません！

若い男　黙ってろ、女！

女　……。（一瞬からだが強ばる）

看護婦が背後から若い男の肩をそっと抱く。

若い男　……。（怯える）

看護婦　だめですよ、埴生さん。みなさんとはもっと仲良くしなくては。

女　あたしがいけなかったんです。あたしが埴生さんの邪魔をしたから……。

看護婦　返しなさい、それ。

女　いいんです、あたしが貸して差しあげたんですもの。ね、そうでしょう、埴生さん？

若い男　これ、返します……。

女　ほんとうにいいんです。あなたの役に立つならあたしも嬉しいんです。どうかしばらく持っていてくださいな。

若い男　やっぱり返します……。

女　お願い、返さないで。困ります、あたしそんなの困りますわ。

若い男　でも……。

看護婦　……。（毛糸の玉をとりあげて女に渡す）

女　こんな……、困ります。困ったわあ。

看護婦　さあ、行きましょう、埴生さん。

若い男　治療室ですか。

看護婦　面会室ですよ。

若い男　……。（女から毛糸の玉を奪う）

看護婦　埴生さん。

若い男　あいつに帰るように言ってください。あいつには会いたくないんです。いいえ、これからも会うつもりはない。そう言ってください。

看護婦　あいつじゃありません。おかあさんです。

若い男　あいつはあいつでいいんだ！

看護婦　おかあさんが可哀想です。おかあさんはあなたのことをとても心配していらっしゃるんです。心配だからあれなんですよ、毎週欠かさず面会にいらっしゃるんです。並のおかあさんだと思ったら大間違いよ。なのになぜいつも会ってあげないんですか。

女　埴生さん、お会いになってあげたら？

若い男　あいつはぼくの病気を疑っているんです。それで退院させようとするんです。でもいいですか？　ぼくは病気なんです。それは確かにあれです、ぼくが病気だっていう立証は誰にもできません。いまあそこにお魚がみえる……、ただそれだけのことですからね。でもほんとうに見えるんだ、二匹のお魚が。見えるということを信じないんで

すか。

看護婦　もちろん信じます。あなたは病気です。誰にもみえないお魚が見えるなんて、そんなの病気に決まっています。重い病気です。

若い男　あいつにもそう言え。おまえの息子は病気だって言え！（さっとズボンを脱いで）ひるよ、ウンコひってまた喰いますよ……。（ヘラヘラ笑う）

看護婦　重いわ、重いのね……。

老人、ひょいと姿をみせて。

老　人　看護婦さん。

看護婦　なんですか？

老　人　わたしと結婚しましょう。

看護婦　……。（立ち去る）

老　人　はは、照れてやがんの、あの年増後家……。（去ろうとする）

女　　待ってください、堀口さん。

老　人　なんですか、奥さん。はやく喋ってください、はやく。こいつが言うんです。おい、ハーフタイムは1分だ、ジャスト1分。こいつは貴重だ、おまえの人生の唯一の休暇だからな。せいぜい休め、全体やすめ……！　聴こえるか堀口、聴こえるだろう？　ほら、お空では竹トンボが富士の高嶺に別れを告げて南に飛んでゆく。地べたでは日の丸のみなさんが悲鳴をあげて合唱する。ワッショイ、ワッショイ、ワッショイ……。さあ、ゴングが鳴った。行け、行ってやつを敗北の地べたに沈めろ。みなさんはおまえのラッシュに痺れてんだぞ。打て、打つんだ堀口。そうだ、脇をしめろ。腰をいれろ。ジャブジャブジャブ、右フック左フック、アッパーだ。いいぞ、ボディを狙え。連打連打、速射砲……。ジャブジャブジャブ、ストレート、フック、ストレート！　打て、顔面を狙え。ササザキの槍なんかへし折っちまえ。ジャブジャブジャブ。バカやろう、てめえのガードに誰が銭なんか払うもんか。下がるな、出ろ、前にでて打つんだ。やつが一つ殴ってきたら二つ殴りかえせ。二つ殴ってきたら四つだ。そうだ、ジャブジャブジャブ……。忘れるな堀口、その呼吸だ。おまえの名はピストンだぞ。ピストン、ラッシュだ、ほら！　シュシュポポシュシュポポシュシュポポシュシュ……、そうだ、いいぞ、皇軍も上海を陥したぞ……！　さあ、言ってやれ。グローブに染みた血を天に翳しながらみなさんに言ってやれ。夫や息子、兄弟を戦地に送ったみなさんに。40歳の堀口、50歳の堀口をみていて下さい。そう言ってやれ。40歳の堀口、50歳の堀口をみていて下さい……！　さいなら。

と、立ち去った。

女　　堀口さん。（と追おうとする）

若い男　芹さん……！（毛糸をピンを張る）

女　　あ……。

若い男　どうしたんです。

女　あたし、どうかしまして？
若い男　糸が震えてる……。
女　お願いです、埴生さん。そんなに強く引かれると、毛糸が切れてしまうじゃありませんか。
若い男　恐いんですか。
女　あたしがなにを恐がらなければいけないのでしょう。
若い男　大丈夫です。ぼくはとても大人しいんです。君はもっと自分を剥きださねばいけない……、先生にそうアドバイスされるくらいなんです。だからなにもしません。その目はなにかして欲しいんですか？
女　あの、ズボンを穿いていただけません。
若い男　……。（ズボンを呑みこもうとする）
女　なにをなさってるの？
若い男　ズボンを吐くにはまずズボンを食べなければなりません。
女　いえ、あの……、ズボンはもう結構です。
若い男　でも……。
女　ほんとうによろしいんです。
若い男　そうですか。
女　……。
若い男　できれば……。
女　なんでしょう？
若い男　ぼくにがっかりして欲しくないんです。その……、ズボンを吐けなかった埋め合わせはいつかきっとしますから……。
女　（ベンチに近づき）ここに坐ってもよろしいかしら。
若い男　え……？　あ、どうぞ。
女　（坐って）そうだわ。あたし、サングラスをかけても構いません？
若い男　眩しいんですか。
女　すこし……。
若い男　ぼくのからだが？
女　お陽さまです。だってあれですもの、きょうはこんなにお空が高いんですもの。
若い男　芹さん。芹さんの奥さん……！（毛糸を引いた）
女　後生だから引っぱらないでくださいな。あたし、編みものができないじゃありませんか。
若い男　これ以上なにを編む必要があるんです。
女　子供たちのセーターですわ。
若い男　ぼくはセーターじゃない。
女　そんなことはわかってます。
若い男　だったらぼくを編まないでください。
女　あたし、あなたを編みまして？
若い男　編んでいるじゃありませんか、ぼくの心をこうやって……。（からだを糸に絡ませる）
女　埴生さん。

若い男　ぼくは編まれたくない。むしろ解かれたいのですが、解こう解こうと足掻けばあがくほど、なぜかいつもこうなって我が身を狭くしちゃうのです……。（と、ますます絡まってしまう）

女　イタズラは困りますわ。

と、立ちあがって糸を引く。

若い男　いっ……！

女　……？

若い男　いいなあ。もう一度してくれませんか。

女　なにをですの？

若い男　これです。クイッ、クイッ……！（糸を引く）

女　あっ……。（小さく身がくねる）

若い男　どうです？　あなたもいくありませんか、芹さんのきれいな奥さん。

女　あやです。あの、あやで構いませんから……。

若い男　妖しいあやさん、お願いです。クイッ、クイッ……！（糸を引く）

女　あっ……。（ひそやかな官能）

若い男　してください。

女　こうですか……。（糸を引く）

若い男　いっ……、いいい……。そこに擬音があればもっといいなあ。

女　クイッ、クイッ……。（糸を引く）

若い男　いっ……、いいいいい……、極端に感じるう。クイッ、クイッ！（糸を引く）

女　あ、いや……。

若い男　どうです、うんと感じませんか？　こう……、なんて言ったらいいんでしょう。はてしなく淫らな感じ……。

女　さあ、どうですか。

若い男　クイッ、クイッ……。（糸を引く）

女　あっ……。（と官能あって）クイッ、クイッ……。（糸を引く）

若い男　いっ……、いいいいい……！（官能が達してグッタリ）

女　……。（恥じる）

若い男　すみません、勝手に乱れちゃって……。でもあれです、ほんとうにいいんです。その、釣糸にひっかけられたお魚のような、そんな気分なんです。そのヒクツキが堪らなくいいんです。これだったんですね……。

女　なにがですの。

若い男　あれです、わが身が解かれるということです。解かれてお魚になる……。

女、ベンチに坐りサングラスをかける。

若い男　やはりぼくが眩しいんですね。

女　そうじゃありません。

若い男　そうに決まってる。なぜならばそれは……、ぼくがいま銀のウロコのひとひらだからです。

女　あたしにはウロコなんて見えませんわ。

若い男　見えている。見えているからあれなんです、そうやって色メガネの底に淫らな心を隠そうとするんです。さあ、その色メガネをはずして瞼を細めてごらんなさい。そこに涙があればもっといい。ほら、あたり一面銀のウロコでいっぱいじゃありませんか。そうしてこれが……、（女の目のまえの空をひとつひとつ指しながら）タナカさん、イトウさん、ヨシダさん、ワタナベさん、フジイさん、サトウさん、モリさん、マツモトさん、ヨシモトさん、ササキさん、タニガワさん、ニシダさん、コバヤシさん、オノさん、イシカワさん、ウチダさん、ヒラオカさん……。（不意に女の乳房をつかんだ）

女　……。（必死に耐える）

若い男　みなさん、淫りに乱れてここにいらっしゃる。ウロコになって、遥かな古代ユーフラテスの川を遡ろうとしていらっしゃる……。わかりますか、あやさん。

女　ええ。あなたは……、そうです、なにか比喩を言おうとしていらっしゃるんですわ。

若い男　そうです。ぼくがいまここにこうやっているということがすでに比喩です、ぼく自身の比喩にすぎないんです。だからあやさん、ぼくはこう言うこともできるんです。ぼくはあなただ……！

女　あたしはあなたじゃありません。だって……、そうだわ。あなたは男です。あたしは女です、とても女らしい女です。そうでしょう？

若い男　そんなの簡単です。まぐわればいい。ぼくとあなたがまぐわれば一挙に解決するのです。

女　そんな下品な言い方はやめて！（行こうとする）

若い男　かあさん……！（糸を引いた）

女　……。

若い男　ぼくです。あの日あの時のぼくです。この震える糸を伝って、淫らなあなたの中へと流れていったぼく……、銀のウロコのひとひらです。クイッ、クイッ……！（糸を引いた）

女　ええ。そうです、そうですわ。あたし、あなたにお会いしたことがあります。それも一度だけ……。たしか区民のための憩いの広場でした。いいえ、間違いありません、区民のための憩いの広場です。あの時もあたしこうやってベンチで編みものをしていました。あの時だけじゃありません。いつもです、いつもでした。子供たちを幼稚園に送りとどけた帰りに買物をして、それからそれから……、いつもいつもです。あたしは区民のための憩いの広場であれです、ベンチで編みものをしたんです。言います、言いますわ。そうです、家のなかにいるのが恐かったんです。だってあの人ったらいつも研究室に閉じこもって帰ってこないんです。3日も4日も帰ってこないんですもの。

若い男　かあさん、ぼくを釣ってください。

女　クイッ、クイッ……！（糸を引く）

若い男　あ、いい……、いいよう……。（小児的な官能）

女　ホッホホホッ……！　あなた、そう言いました、あの時も。ベンチの陰からいきなり

あたしの目の前に現れて、あたしの膝から転げおちた毛糸の玉を拾いあげて……、奥さんとてもいいお天気ですね。ええ、だからあたしも言いました、ほんとうによいお天気ですわ。だってほんとうによいお天気でしたもの。そうでしょ？　あなたの白い歯がとっても眩しくて……。その時です、あたしにはわかったんです、夫には女がいるって！

看護婦　……。（現れて見ている）

女　お願い、あたしをそんなに見つめないで。たったそれだけのことじゃありませんか。ほかに何があったっていうんです？　なぜつけ廻すんです？

若い男　もっともっと大胆に乱れましょう。さあ、わが身とその身を解けあいましょう。

女　誰？　あなた、ほんとうは誰よ。

若い男　ぼくですよ、かあさん。あなたの息子エロースです。

女　あたし、エロじゃない。

若い男　でも、ぼくたちはいまこうやってオマンコしあっている。

女　これがオマンコですか？

若い男　オマンコだあ。クイッ、クイッ……！

女　ケイジ？　どこに行ったの、ケイジ？

看護婦　……。（ゆっくりと近づく）

若い男　帰ってきた。かあさん、あいつが会社から帰ってきたよ、ひとつ目の怪物が……。

（看護婦に）あっち行ってろ、ティフォーン！

女　ケイジ、助けて！　ケイジ……？　クイッ、クイッ……！

若い男　いいいいっ……！　クイッ、クイッ……！

女　あああああっ……。

毛糸がもつれ、二人の腰が烈しく揺れる。

ディスコ風の音楽。

医師や老人ら患者たちが群れて現れ、踊りだす。

看護婦　……。（ハサミで毛糸をぷっつりと切る）

突然の静寂。

老　人　みなさあん、正午ですよお。きっかり正午ですよお。時計を合わせてくださあい。配膳室まで食事をとりにきてくださあい……。

医　師　はい、いいですよ、みなさん。なかなか素敵ですよ。そうです。さあ、腕を伸ばして大地に触れましょう。箱庭の砂をいじくりましょう……。

女　（蹲って）ごめんなさい、あなた……。ごめんなさい……、ごめんなさいごめんなさい……。

ゆっくりと暗転です。

若い女が車椅子にのって廊下を行く。
と、窓に女の姿がぼんやり浮かびあがる。

女　アニマさん。
若い女　……。
女　アニマさんですか。
若い女　どなたでしょう……。
女　アニマさんですね？　アニマさんではないかと思ったのです。だってとてもあたしに似ていらっしゃいますもの……。

消える。
若い女が行こうとすると、べつの窓にまた女の姿が浮かびあがる。
女はサングラスをかけている。

女　アニマさん。
若い女　……。
女　立教大学のアニマさんですか。
若い女　ええ。英文科のアニマですが、あなたは……？
女　立教大学のアニマさんですね？　立教大学のアニマさんではないかと思ったのです。だってとてもあたしに似ていらっしゃいますもの……。

消える。
若い女が行こうとすると、更にべつの窓に女の姿が浮かびあがる。
女は鬼面を被っている。

女　アニマさん。
若い女　その顔を見せてください。
女　どうかあたしをつけ廻すのはやめてください。あたし、苦しいんです。苦しい……。わかってください、アニマさん。あたしは苦しい……。

女、消える。
と、そこへ医師が現れる。

医師　アニマくん。
若い女　……。
医師　さっき病室を覗いたら病室にいないんでどこかなあ、この近辺かなあと思ってこの近辺に来てみたらやっぱりこの近辺だったんだけど……、この近辺でなにしてるのかしら？　ぼんやりしてるのかしら？　ワケ教えて。わたし、チカラになるわ。
若い女　……。
医師　わたしのチカラいらない？

若い女　……。
医　師　わたしのチカラ信じてないのね。（ベンチをぐいと持ちあげて）これでどう？
若い女　……。（すこし笑う）
医　師　ありがとう、アニマくん。その単純さがわたしとっても嬉しい。ズボン脱いじゃっていい？
若い女　……。
医　師　白衣脱いじゃお。（白衣を脱ぐと胸にブラジャー）
若い女　……。（行こうとする）
医　師　お願い、アニマ！　わたしをいやらしい医者だなんて思わないであれしてちょうだい、素敵なお姉さまと思ってぞんぶんに甘えてちょうだい。
若い女　あいつが……。
医　師　だめ。
若い女　……。
医　師　だめよ、アニマ。足もと見たらあれよ、あまりの高さに目ん玉くるくるまわって吊橋からまっ逆さま。脳天パアよ、脳みそグチャグチャよ、ね？　だからほら、お姉さまの瞳だけまっすぐに見つめてこっちに歩いていらっしゃい。いいわね？
若い女　……。
医　師　さあ、どうしたの？　あいつがドイツに留学したの？
若い女　ここは吊橋なんですか？
医　師　え？
若い女　ここは……。
医　師　そうよ。そうだわ、ココアはあれだわ。アオギリ科の熱帯高木でその種をタキギで焙ってこしらえたのが明治ココア。でも明治ココアも森永ココアもここには置いてないの。だってあれだもの。あれにはビタミンCがほとんどあれなんだもん。わかるでしょう、アニマ。人生を過不足なく、つまり平均的に生きるにはビタミンCが不可欠だってこと。そうよ。だからココアなんて忘れていいのよ。やっぱりズボン脱いでCしましょうね。（脱いだ）
若い女　……。（立ってしまう）
医　師　お願い、見捨てないで……！　そう、そうよ。なにも気に病むことはないのよ。わたしがズボン脱いだからってあれだもん、そこにふしだらな意味が寝そべってるわけじゃないもん。だからいいでしょう？　わたしがパンティ一枚になったって平気よね？　わたしは平気よ。からだに自信があるわけじゃないけど、わたしかぎりなく平気。ヘッチャラ。わかるでしょう、アニマくん。いまのあなたにはこのヘッチャラが必要なのよ。見られたってヘッチャラっていうこのヘッチャラさが……。さあ、アニマ、大胆に恥毛なびかせて歩いておいで。鵞鳥のように歩いておいで。そうすればあなたの病気は癒るわ、一発で癒るわ。
若い女　あたし……。
医　師　落ちるわよ、アニマ。谷底で脳天パアよ。
若い女　……。（車椅子に坐る）
医　師　アニマあああ！

若い女　先生……。
医　師　あら、アニマくん、この近辺でなにしてるのかしら？　ぼんやりしてるのかしら？　どうしてぼんやりしてるのかしら？　ワケ教えて。わたし、チカラになるわ。
若い女　……。
医　師　わたしのチカラいらない？
若い女　……。
医　師　わたしのチカラ信じてないのね。（ベンチを持ち上げようとする）
若い女　もういいんです。
医　師　えっ、もういいの？　なにがもういいの？
若い女　あたし……。
医　師　あたし？
若い女　あたし……。
医　師　好きだなあ、そういうの。よし、思いきってパンツ脱いじゃお。
若い女　……。（医師のズボンを投げつける）
医　師　勘違いしないで。その、わたしは……、いえ、彼はスケベじゃないんです。彼はただあなたに勃起した。その、つまり……、あなたの思想に勃起しただけなんです。ええ、そうなんです、アニマくん。彼はあれです、毎日まいにちここで50人近い患者さんと面接を行っています。その50人近い患者さんの一人ひとりがですよ。わたしいま人の話し声が聴こえるんです。わたしいま誰かにつけ狙われているんです。わたしに電波を送ってくる人がいるんです。わたし土星人なんです。わたし……、わたしが、わたしを、わたしと、わたしの、わたしさえ、わたしだけ、わたし、わたし……、たわし、もう嫌！　そうでしょう、若い人？　そうやって毎日50近いわたくし小説を読まされてごらんなさい。彼はたまらんです。うんざりです。だから彼は思うんです。人はどうしてあれなんだろ？　自分のことをわたしなんて言うんだろ？　人はどうしてそうもわたしに興味をもつんだろ？　わたしがわたしに興味もつからわたしがわたしの溝にはまって、わたしがわたしの病気に罹るんじゃないかしら？　故に若い人、たったいまからあなたは自分のことを彼女と言いなさい。そうすればたなあは癒るのです。21世紀はもうこの近辺まで歩いてきているんです。
若い女　わたし……。
医　師　わたしは要らん。
若い女　たわし……。
医　師　そうです。わたしなんてのはあれです。たかがオカマ掘ってすり切れたタワシに過ぎん。
若い女　たわし、疲れました……。
医　師　お鍋の洗いすぎで？
若い女　それが疲れるんです。
医　師　それってどれ？　あれ？　これ？
若い女　それです。
医　師　代名詞を使われるとあれです。大学入試に追っかけられてるようで彼も疲れます。そ

の……、それはたぶん彼が大学を中退したせいでしょう。いまでも毎年二月になると受験勉強している夢をみるんですよ。卒業しとくんだった。

若い女　先生……。

医　師　（びっくりして自分を指す）彼？　彼に疲れるんですか？　なぜ彼に疲れるんです？　ひょっとしてあれですか？　彼という漢字と疲れるという漢字が紛らわしくって目が疲れるんですね？　サンテドウありますよ。

若い女　目薬はいいんです。

医　師　ええ、目薬は胃にいいんです。悪酔いにはすっきりします。（目薬を呑みほす）

若い女　とてもついていけません。

医　師　ついてくるかい……、（と歌い）小林旭に？

若い女　先生です。

医　師　彼？　彼に疲れるんですか？　なぜ彼に疲れるんです？　ひょっとしてあれですか？　彼という漢字と疲れるという漢字が……。

若い女　やめてください。

医　師　……。

若い女　なぜです？　なぜそんなにメチャクチャなんです？

医　師　彼はメチャクチャですか？　バラバラですか？

若い女　バラバラです。

医　師　彼がバラバラだとすればあれです、そこにひとつの殺人事件があったのです。いつどこで誰が殺したのか、それはわかりません。動機はむろんのこと死体の行方さえ不明です。しかし殺人が行われたことだけは事実です。なぜならば、なぜならば……、あそこにいるカラスが黒いからです。彼も、たなあも、たなあもたなあもバラバラだからです。桜の花びらさえバラバラ……。しかしなぜバラバラじゃいけないんだ？　答えろ、カラス。ゴルゴダの丘で串焼きにされちまったカラスよ。おまえあれか？　バラバラに転がるおまえの下僕を串焼きに、この彼と一杯飲めっか？　飲んで歌えっか？　（歌う）カラスなぜ鳴くの、カラスの勝手かしら……。

老人がお膳をもってはいってくる。

医　師　なにか？

老　人　殺人事件をもってきました。わざと間違えました。食事をもってきました。

医　師　カラスの串焼きですか？

老　人　シャケのおにぎりと肉ジャガです。

医　師　彼はイモは好かん。

老　人　彼女にです……。

若い男がお魚のように歩きまわっている。

若い男　ふ……。

医　師　フ？

若い男　ふ……。
医　師　へじゃなくて、フですね？
若い男　ふ……。
医　師　それはあれですか。歩のない将棋は負け将棋、の、フですか？
若い男　ふ……。
医　師　そうか。フがない人生はふがいない、の、フでしょ。
若い男　ふ……。
医　師　わかりました。要するにハヒフヘホのフですね？
若い男　ふ……。
医　師　つまり、ハヒフヘホのフを落としたのでハヒフヘホのフを探している。
若い男　ふ……。
医　師　好きだなあ、こういう無意味な抽象。
若い男　ふ……。
医　師　彼も一緒に探してあげましょう。フ……。
若い男　ふ……。
老　人　フ、あるよ。
医　師　フ？
老　人　フだよ。ほら、鮒さん……。（と麩をばら撒いた）
若い男　ふ、ふ、ふ……。（拾って食べる）
医　師　好かん。意味ある具体は好かんです。

と、立ち去る。
若い男は穴のなかでぼんやりする。

老　人　食べないの？
若い女　すみません……。
老　人　食べれば？　精がつくよ、うんと。
若い女　ええ……。（車椅子から下りる）
老　人　彼女、あれ？　学生さん？
若い女　わかるんですね……。
老　人　わからないからあてずっぽうに訊いてみたんだよ。
若い女　……。
老　人　学生さん、あれ？　ここ初めて？
若い女　ええ……。
老　人　わたしは30年もいるんだよ、ここ。
若い女　ベテランなんですね。
老　人　ここだけのあれなんだけど、わたしはもうどこも悪くないんです。でも退院させてもらえない。
若い女　そうですか。
老　人　なに、それ……？（女の抱きしめているものに手を伸ばす）

若い女　いえ……。（隠す。どうもガラスのようである）
老　人　食べたら？　おいしいよ、その肉ジャガ。
若い女　いただきます……。
老　人　食べると死ぬよ。
若い女　はい？
老　人　食べて死なない人もいる……。でも第三病棟のシマヌキさんはあれですよ、その肉ジャガ食べてきのうひっそり息をひきとりました。付添いのお姉さんが砒素を盛ったんです。耐えられなかったんですよ、その……、なんて言うか……、シマちゃん、好きだったのに。
若い女　……。
老　人　食べないの？　食べればいいのに。食べにくいでしょう、肉ジャガ。だからおにぎり食べればいいのに。おにぎりは大丈夫ですよ、わたしがニギニギしたんだから。食べたら？
若い女　いただきます……。
老　人　あっ、危ない。
若い女　今度はおにぎりで誰を殺そうというんです。
老　人　そうじゃないんだよ。そうじゃなくてただ学生さんはあれかな、おにぎりの上手な食べかた知ってるかな？　そう思ったものだから……。
若い女　おにぎりにも食べかたがあるんですか？
老　人　学生さん、あれじゃない？　甲府でとれたんじゃない？
若い女　あいつに聞いたんですね。
老　人　あいつ？
若い女　あいつです……。（頑になる）
老　人　そうじゃないんだよ。その……、昔むかしある所に甲府生まれの女がいて、おにぎりにも食べかたがあるんですか……、そう聞いたものだから。あのね、甲府の人。これも昔むかし、わたしの友人がおにぎりの食べかたについて一家言もっていました。で、ある時、わたしがおにぎりを食べているとそいつが言うんです……。（おにぎり取って）「いいかい。おまえはね、そのテッペンからモクモク食べ始めて、真中のおかずの所まで食べるだろう。その時、俺はいつもどうするつもりか見てるんだよ。お前は、まるで当たり前みたいに、その真中のおかずを、パクリやっちゃって、それから、おかずも何もない下の方を、すこしつまらなそうにパクパクやってゆくじゃないか。そうだろう。ね、俺に言わせれば、まるで、芸がないってもんだよ。そうじゃないか。教えてやるよ。まず、テッペンから、モクモクやるだろう。おかずが出て来る。ひっくり返すんだよ。わかるかい。今度はお尻の方からパクパクやるんだ。ね。最後におかずのところが残る、それを最後の一口にするんだ。これが順序って言うもんだ。つまり計画だよ。作戦さ。最後まで楽しいってわけだ」……。学生さん、これについて卒論書ける？
若い女　とてもついていけません。
老　人　なぜ？
若い女　どこか小市民の匂いがするでしょう。

老　人　どこがです。
若い女　そのおにぎりへのこだわり方。
老　人　あ、男性の急所をにぎられた気分です。でも死人とは手に手をとって生きてくれませんか。
若い女　亡くなったんですか。
老　人　はい、新劇通りのアパートで……。その時ちょうど彼はセブンイレブンの開いててよかったのおにぎりを食べていたんだそうです。ええ、彼の信念どおりに……。で、最後のひとくち、おにぎりのなかで一番楽しい所を……、おかずを食べようとした時にあれです、アパートにヘリコプターが落っこちてきてあっさり死にました。ミノルくん、好きだったのに……。それからです。それからわたしはこう考えるようになりました。おにぎりはまず真二つに割って、その一番楽しいところ……、つまり、おかずからパクつかなければならない。そうでしょう、甲府の人。ええ、それはあれです。おかずを初めに食べてしまうと残りの部分はつまらない。ミノルくんが言うようにまるで楽しみというものがない。でもね、ミノちゃん、俺はじっと我慢してる。じっと我慢して、味けない残りを食べてる。あれだからね、おにぎりも人生も芸じゃないからね。芸なもんか。わかってくれるだろう、ミノちゃん？　ミノちゃんはわかってくれるでしょうか、甲府の人。
若い女　アニマです。
老　人　なにが？
若い女　あたしです。
老　人　アニマ？
若い女　はい、アニマです。
老　人　あんた、アニマ？
若い女　アニマです……。
老　人　アニマさん、アニマル？
若い女　いいえ、アニマです……。（笑っている）
老　人　だったら俺の肩に爪を立てるんじゃない！
若い女　え……？
老　人　どけろ、その爪。
若い男　（女に）行ったほうがいいですよ。
若い女　ええ、でも……。
老　人　俺をバカにするのか。
若い女　そんな……。
老　人　あ、バカにした。あれだな？　俺がおかずだけパクついてリングを去った。そう思ってバカにしてんだろう。
若い男　誰もバカになんかしてやしません。
老　人　だったら俺の肩をつかむんじゃない！　俺を誰だと思ってるんだ？
若い男　堀口です、あなたは……。

医師がキャベツを喰い散らかしながら匍匐前進してくる。

医　師　ピストン堀口……。
老　人　聴こえん。
医　師　ピストン堀口。
老　人　もう一度言ってみろ。
医　師　なんどだって言ってあげましょう。ピストン堀口……。
若い男　あっち行ってろ。
医　師　ピストン堀口、ピストン堀口、ピストン堀口、シュシュポポシュシュシュポポシュシュポ……、ピストン堀口、ピストン堀口、前進、シュシュポポシュシュシュポポ……。
老　人　ああ、みなさんの声が聴こえる……。
医　師　前進、シュシュポポシュシュポポ……。（と消えていく）
老　人　俺を行かせてくれ。
若い男　どこにです。
老　人　決まってるじゃないか。黄色い総武線にのって水道橋へ行くんだよ、みなさんが連なっている後楽園ホールへ……。あれだからな、俺はみなさんに約束したんだからな。40歳の堀口、50歳の堀口を見ていてください、そう約束したんだから……。わたしは塚原ト伝を尊敬しているのです。ト伝は白髪でいながら一代の剣客として名をなしました。ボクシングだって術です。40歳、50歳の堀口を実現するために、あらゆるボクシングの技術を探求するのがわたしの一生の目的です。長い目でどうぞわたしのリングをみていて下さい……。みなさん、わたしです。堀口です。70歳の堀口です。70歳の堀口が帰ってまいりました。70歳の堀口であいすまんです。
若い男　おじさん。
老　人　俺の肩を摑むんじゃない！

男を突きはなした瞬間に自分もへたりこむ。

老　人　どうしてなんです、みなさん。どうして黙っているんです。あれですよ、わたしはいまササザキのパンチ顎にかっ喰らって倒れたんですよ。立て、堀口……。なぜそう言ってくれないんです。いいえ。なぜいつかのように堀口名を惜しめ、引退しろって、そう叫んでミカンの皮をぶつけてくれないんです。なぜ？　なぜ？　なぜ？　なぜ……？
若い男　いいんですよ、おじさん。おじさんはもう戦わなくていいんです。
老　人　放せ、レフリー。みなさんはあれなんだよ、その……、俺が立ちあがるのを待ってる、観客席で息をつめて待ってるんだよ。いまに始まる。みなさんの合唱が始まる。ワッショイワッショイワッショイ……。わかるよ、俺には。そうだろう？　俺はあれだからな、みなさんのそんな息を呼吸してきたんだからな。
若い男　いいえ、いないんです。後楽園にはそんなみなさんはもういない……。
老　人　いない？
若い男　誰もいません。
老　人　後楽園はすたれたのか？
若い男　健在です。でも、いない。あなたが戦ったときのみなさんはもういない。

老　人　お尻が痛いあの椅子にも？
若い男　ええ、薄暗いあの通路にも……。
老　人　（女に）おい、俺のみなさんをどこにやった。
若い女　あたし、知りません。
老　人　俺を知らんのか。
若い女　知りません。
老　人　名前くらい知ってるよね。
若い女　知りません。
老　人　教えてやるよ。（車椅子を蹴とばして髪をつかんだ）
若い女　ひっ……。
若い男　（老人を捕まえ）はやく行くんです。
若い女　そんな……、あたし、歩けないんです。歩けない……！

這って車椅子に辿りつきます。

若い男　さ、行きましょう、おじさん。
老　人　バカやろう。みなさんのいない後楽園に上れるか。
若い男　だからあれです、みなさんはこっちです。
老　人　どっちですか、みなさあん……？
若い男　あっちです。
老　人　あっちはあれか、水道橋か？
若い男　水道橋の近くです。
老　人　飯田橋だったのか。飯田橋付近のみなさあん、70歳の堀口はこっちですよお。水道橋ですよお。
若い男　……。
老　人　戻ってこない……。どうして誰も戻ってこないんだろう。
若い男　水があれば……、そこに水がありさえすれば、みなさんはきっと帰ってくるでしょう。
老　人　水道橋の水は涸れたのか。
若い男　カラカラです。
老　人　ならば蛇口をひねれ。
若い男　そうです、涙を流せばいいんです。そうすれば、その涙の淵にきっとみなさんが帰ってきます。お魚になったみなさんが……。だって涙はこの世でいちばん小さな海ですからね。わかるでしょう、堀口さん。ぼくたちはもうあれです、そうやってしかいつかのみなさんに近づくことはできないんです。及ばずながらぼくも力になります。さあ、二人して涙を流しましょう。
老　人　なんだかきれい過ぎる。水清ければ魚棲まずって言うぞ。
若い男　きれいも度が過ぎれば汚いものです。
老　人　（ヒステリックに笑って）おまえら、人を丸めこむ天才だな。だが俺は知ってるぞ。それがあれだ、おまえらのヤリクチじゃねえか。おにぎりの一番おいしいとこだけさっさと喰っちまって、残りはポイと捨てやがる。そうだろう？　あの時だって俺は引

退なんかちっとも考えてなかったのに、あれだ。40歳の堀口、50歳の堀口がないことがやっとわかりましたって、そうやって世間に勝手に発表したのはおまえらだろう？そうやって俺が二度とリングに上がれなくしたのも……、シュッシュッポポ……、おまえらだ。シュッシュポポ……、俺をこの病院に閉じこめたのもおまえらだ。シュシュポポ、シュシュポポ、シュシュポポシュシュポポシュシュ……。

若い男　おじさん。（羽交い締めにする）

若い女　（怯える）あたしじゃないんです。あたしは悪くない……。

男が飛びこんでくる。なぜか背広に着替えている。

男　どうしたんですか。

若い男　発作です。

男　そうですか。あれですから看護婦さん呼びましょう。

若い男　呼ぶな！

男　しかしあれですから……。

若い男　そうじゃないんです。発作が病院側にわかるとあれなんです、堀口さんは電気ショックにかけられるんです。だから一発、堀口さんのボディに一発かましてください。その……、ぼくは来なかったことにしてください。（立ち去ろうとする）

男　芹さん！

若い男　ぼくはついてない……。

若い男　はやく。

男　はい。あの……、行きますよ、堀口さん。芹です。芹がいきますからね。（と殴って）いきましたよ、堀口さん。

老　人　……。（倒れる）

男　……。（近づく）

若い男　触るな！　おじさん、死んだんですか？　おじさん……。（頬をペタペタして）あなたはなんて酷い人でしょう。堀口さん、こんなに痛がってる。

老　人　痛い……。

男　すみません。その……、つい力んじゃって。

若い男　血も涙もない人ですね、殴ってもいないのに謝るフリなんかして。（老人を背負う）

男　……。（手伝う）

若い男　頼んでもいないのに。

男　失礼……。

老　人　埴生くん。

若い男　なんですか。

老　人　あれだね、水道橋の蛇口はどこにあるんだろうね。

若い男　探すんです、みなさんに会いたかったら。

老　人　そうだね。埴生くん。

若い男　なんですか。

老　人　あれだね、人生は3分でちょうどいいのにね。

若い男　そうですか。
老　人　３分でいいよ、あんなもの。疲れるよ……。
と立ち去っていった。
男　ついてない。背広に着替えてくるんじゃなかった。
若い女　（ボソリと）先生……。
男　あなたですか、その……、オルガンを弾いていらしたのは。
若い女　弾いていません……。
男　あなただって聞いてきたんですが、その、看護婦さんに。
若い女　弾いていないんです、いま……。
男　それはあれです、わかりますが……、午後も弾かれますか。つまり、お食事のあとにという意味ですが。
若い女　わかりません。
男　わかりませんか？
若い女　わかりません。自分で自分のちょっと先が……。
男　そうですか。
若い女　すみません。
男　え？　あ、いいんですが、できればその……。
若い女　できるだけそうします。
男　あ、どうも。ぼくじゃないんです。その、家内があれでして……、ちょっとオルガンの音を……。そうですか、感謝します。（去ろうとする）
若い女　先生。
男　は？
若い女　あの、靴を返していただけません？
男　クツ？
若い女　あたしの靴です。
男　あ……。（ポケットの白いハイヒールに気づき）これ、あなたの靴……、ハイヒールだったんですか。
若い女　あたしのです。いつか池袋で……、東武デパートの地下特売場であれです、先生に買っていただいた９８０円の、エナメルの白いハイヒールです。
男　アニマくん？
若い女　……。
男　いや、ぼくの人違いでした。（去ろうとする）
若い女　先生。
男　……。
若い女　あたしです。板橋区上板橋２の19の２。富士見荘のとある六帖一間に囲われていたアニマです……。
男　ぼくはその、富士見荘なんて知らない。
若い女　窓を開ければ板橋農協の広場が見える、あの富士見荘です。

男　知りません。
若い女　いいえ……。あたしの故郷は甲府だから富士のみえるマンションがいい。そう我儘いったら、先生……、助教授の給料は安いから、教授になるまではこの富士見荘で我慢つみ重ねてくれないか。どうあっても富士が見たければ、この窓に富士山描いてあげよう。そう言って先生たら、白いペンキで窓に一筆の山形……。（と窓の切れ端をだせば確かに一筆の山形）ほら、来てごらん。この富士に二人して立ってみればあれ、板橋農協広場もぶどうのお里甲府盆地に見えてくる。太宰はね、富士には月見草がよく似合う……、そう言ったけど、太宰はダサイね。やはり津軽のイモだね。ぼくならばこう言うよ、富士にはぶどうのブラブラがよく似合う。なぜってそうでしょう。風景のみっともなさこそが、いま、語るに値するからです……。
男　やめてください。
若い女　……。
男　いや、その……、怒鳴ったりしてすみません。しかしあれです、あなたの勘違いです。ぼくは富士見荘なんて知らないし、あなたも……、知らない。
若い女　あたしです。
男　そうか。あれですね、あなたは立教の学生さんですね？
若い女　ええ。
男　で、ぼくを知っている……。
若い女　ええ。
男　そうか、そうだったんですか。ありうることです。でもあれです、ぼくはあなたのことを憶えていないんです。
若い女　あたしの顔をみてください。
男　え……？
若い女　あたしの顔に憶えがありません？
男　はあ。その……、できる限り、ま、名前と顔を合致させよう。いつもそう努力はしているんですが、なかなかそうもいかなくてあれです。顔も満足に覚えられないのが教師の現状です。つまり、学生の数が多すぎる……。しかしいいですか？　断っておきますが、ぼくは講義のなかでそんなことを言った憶えはありません。その……、富士にはぶどうのブラブラがよく似合うだなんて、はは……、そんな下品な。
若い女　言いました。
男　富士にはぶどうのブラブラがよく似合うって？
若い女　ええ。
男　ぼくが？
若い女　ええ。
男　太宰はダサイ、津軽のイモだ。風景のみっともなさこそがいま語るに値する……。そう言ったんですか、ぼくが？
若い女　ええ。
男　はは……、バカな。ありえないことです。だってそうでしょう。あれでしょう？　風景が無様だからこそ富士には月見草がよく似合う……、そう言うべきなんです。ぼくにはよくわかります。その、なんて言うか……、富士には月見草がよく似合う、そう

言ってみせなければならなかった太宰の悲しい心もちがです。それをブラブラだなんて、はは……、ありえない。

若い女　いいえ、言いました。

男　ブラブラを？

若い女　ブラブラをです。

男　言いません。

若い女　言いました。

男　本人が言わないといっているんです。

若い女　言いました。

男　言わない。

若い女　言ったんです……！

男　言うもんか！（震えている。背中が痒いのかも知れない）

若い女　富士にはぶどうのブラブラがよく似合う……。そう言って先生、あたしをいきなり畳にねじ伏せてあれしたんです、この素足にそのハイヒールを履かせたんです。履かせて……、君の白い足にはこの白いハイヒールがよく似合う。そう囁きながら先生たら、あたしの脹ら脛を微妙に撫でるんです。君の白い足にはこの白いハイヒールがよく似合う……。先生たら涙を浮かべて、脹ら脛から太股にそっと手を伸ばすんです。あたし、嬉しかった。だってあたしの足は黒いんです。黒くてぶっ太くて無様なんです。でも先生たら、君の白い足にはこの白いハイヒールがよく似合う……、震えながらパンティをずりおろすんです。その時あたし思いました。あれね、あれだわ、自分をもっと大切にしよう。大切にして、その……、この人のお妾さんになりましょう。富士のみえるマンションでなくてもいい。いいえ、板橋区上板橋2の19の2、オンボロアパートの窓に描かれたこの一筆の山形こそ、ほんものの富士山。そうしてあれが……、農協広場があたしの故郷、甲府盆地。これがあたしがあたしであるあれだ……、そう思ったんです。

男　やめろ！

若い女　……。

男　ここはあれです、あなたの富士見荘じゃないんです。病院のです、娯楽室です。みんなのための娯楽室。あなたにはそのことがあれですか、わかっているのですか。

若い女　そうですか。

男　はい。

若い女　娯楽室ですか。

男　娯楽室です。

若い女　上板橋の富士見荘が！

男　富士見荘じゃない、ここ！　わかりますか、ここ。つまり、ここ……！

男、ハイヒールの踵で背中をひっかく。

長すぎる沈黙。緊張が緩んでくる。

若い女　わかりました……。

男　ありがとう。
若い女　そうじゃないかと思ったんです。
男　そうなんです。
若い女　それがわからなかった……。（涙が零れる）
男　泣かないでください。
若い女　ほんとうにわからなかったんです。先生に捨てられるまではあれだなんて、富士見荘が娯楽室だなんて……。
男　その……、もうやめましょう。
若い女　ええ。あたし、バカでした。あたし忘れます。もう忘れよう……、そう思ってあたしこの病院に来たんです。
男　そうです。あなたになにがあったのか、ぼくにはわかりません。しかし、忘れることがその……、ここでは一番あれです。
若い女　だから、そのハイヒールを返して欲しいんです。
男　あ……。これ、あなたのでしたね。
若い女　あたしのです。
男　あなたのです。その、中庭の用水池にあれしてあったものですから……。（渡そうとする）
若い女　……。（その手首を掴んだ）
男　……？
若い女　あたし、待っていたんです。こうやって、先生の好きな肉ジャガを拵えて待っていたんです。あの富士見荘の台所の板の間に坐って、カレンダーもめくらずに待っていたんです。農協広場の靴音にきき耳をたてて先生を待っていたんです。
男　放してください。
若い女　あたし、待って待って待ちくたびれたら、ようやく捨てられたことに気がついて、立ち上がろうとしたら……、立てなかった。歩こうと思っても歩けなかった……。わかりますか、先生。あたしは歩けないんです。歩けない……。
男　お願いだから放してください。その、家内に見られるとまずいんです。つまり、家内は嫉妬深いタチで……。
若い女　わかっています。そんなことはとうにわかっているんです。だから……、そうです、なにも先生と縒りを戻そうと言っているのではないんです。歩けない……、そう言っているだけなんです。あたしは歩けない……。だから靴を履かせて欲しいんです。先生、靴を履かせてください。
男　なぜあれなんです、ぼくがあなたに靴を履かせなければいけないんです。
若い女　これはあたしのなんです。東武の地下特売場で先生に買っていただいたハイヒールなんです。
男　それはさっき聞いてわかりました。
若い女　だったらなぜです、先生はなぜあれなんです。このハイヒールだけでもあたしに置いてってくれなかったんです。
男　ぼくじゃない……！
若い女　あたし、このハイヒールを履かされて先生に抱かれていたんです。あの富士見荘でい

つもいつも抱かれていたんです。三年……、三年間もです。そうしてこのハイヒールがあたしの前から消えた時、あたしは歩けなくなっていた……。靴を履かせてくれるくらいいいじゃないですか。

男　わかりました。

若い女　なにがわかったんです。

男　この靴を履かせて欲しい、あなたがそう言うから履かせてあげよう……、そう言っているんです。しかしいいですか。あれですよ、ぼくはあなたの言う先生じゃない。それだけはわかってください。

若い女　なにもわかってないじゃないか！

男　怒鳴るな！

男が摑まれていた手を引きちぎると、女が車椅子からずり落ちた。

若い女　わかってない。先生はちっともわかってない。富士見荘の窓に描かれたこの一筆の山形……、これはもうただのペンキ絵でしかない。そのことがわかってないんです。

男　わかってるとも！　それはきっとただのペンキ絵です。だってあれでしょう？　ペンキで描いたんでしょう？　だからそうですよ、初めっからただのペンキ絵だったに決まってる……！　しかしそれでなぜいけないんです。ペンキ絵がペンキ絵でなぜだめなんです。ペンキ絵はペンキ絵でいいじゃありませんか。第一、それではペンキ絵が可愛想だ。第二に……、この話はやめましょう。（落ちつきをとり戻そうとする）だって……、ここは娯楽室なんです。みんなのための娯楽室……。娯楽室であれです、あなたがシュミーズを脱いだらぼくは迷惑です。みなさんも迷惑です……。

若い女　先生。

男　いいえ、わかっています。さあ、足を出してください。

若い女　……。（足をさし出す）

男　……。（できない）

若い女　なにを怯えているんです。

男　勘違いしてもらっては困る。その……、ぼくは痒いんです。その、背中が痒いだけで……。

若い女　そうですよ、先生。あたし、アニマなんです。先生のアニマ……。ええ、先生たらあたしの顔をよく憶えていなかったんです。だって先生たらいつもあれだもの、そうやってあたしの足しか見つめてなかったもの……。さあ、この足にそのハイヒール履かせて撫ででごらんなさい。そうすればもっとはっきりします、あたしがアニマだって……。

男　君は……。（ボロリと靴を落としてしまう）

若い女　アニマです。

男　アニマじゃない！

若い女　アニマです。

男　君は誰なんだ？

若い女　先生のアニマです……。（人形のように笑っている）

男　違う！　なぜならアニマは……、ぼくのアニマはもうこの世にはいないからです。ぼくがこの手で絞め殺したからです……！

若い女　ふふふ……、アニマは死にません。アニマは誰にも殺せません……。

男　殺したんだ、この手で……！（からだが震えてくる）か、彼女の死体は、八王子の遣水の林のなかです。その……、遣水には知りあいの別荘があって、二人でそこへ出かけた時にあれです、殺した……。いえ、その……、隠すつもりじゃなかったんです。殺した足でそのまま自首するつもりだった。でも、あれで……、家内のことが気になって、その……、家内は、つまり、ぼくとアニマくんとのあれで気が触れたんです。で……、そうだ、ぼくはあれだ。事務員のタナカさんに打ちあけた。君も知ってるだろう、立教の学生なら。ほら、授業料の窓口に坐ってるタナカさん、10年も坐ってるタナカさん……。いや、タナカさんだけじゃない。同僚のイトウ助教授、ミキ助教授にもあれした。でも誰も信じてあれしてくれなかった。教授の椅子が目の前にぶら下がってる君が……、君がそんなバカなことをするわけがない。そう言ってとりあってくれなかった。でもぼくは殺した。殺したんだ、一人の女性を……。信じてくれ、遣水の林には死体が埋まっている……。ぼくはその責任をとらなくちゃいけない。そうだろう？　ぼくは許されちゃいけない。ぼくは、その……、赤ん坊じゃないんだからね。38歳の立派な大人なんだからね。でも許されている。ぼくはぼくの知らないところで許されている……。許されて、許されて、許されて……、ははは……！

若い女　……。（靴を拾って履く）

男　さあ、警察に行ってくれ。警察はきっとあれだろうからね、ぼくよりも君を信用するだろうからね。君だってあれだろう？　ぼくを疑ってんだろう？　疑ってるからぼくのことをいろいろ調べにきたんだろう。その……、彼女から聞いたことがあるよ、仲のいいトモダチがいるって。君だね？　君だよ、君なんだろう……？　さあ、警察に行ってくれ。遣水に行ってくれ！

若い女　（立ちあがり）見てよ、先生。立ってる……。あたし、立っています……！

男　背中が……、背中が痒ううういっ……！

看護婦が飛びこんでくる。

看護婦　芹さん、大変です。

男　お願いです、背中ひっ掻いてください。

看護婦　芹さん、大変です……。（掻いてやる）

男　上、もっと上です。

看護婦　どこですか、芹さん。ここですか？

男　そこです……。

看護婦　芹さん、大変です。

男　強く、もっと強くです。

看護婦　どのくらいですか、芹さん。このくらいですか？

男　そのくらいです……。

看護婦　芹さん、大変です。

男　なにか……？
看護婦　奥さんの姿が見あたりません。
男　え？　家内が？
看護婦　あたくしは悪くないんです。あたくしは、その……、ただお便所に行きたかったのでお便所に行った。その隙に奥さんがいなくなった。だからあたくしは悪くないんです。わかってください。
男　あや……。（蒼ざめて走り去った）
若い女　見てよ、看護婦さん。あたし立ってる。立ってる……！（涙さえ浮かべている）
看護婦　わかってます。（車椅子に坐らせ）無理です。便所に屈んでる時も患者さんを見ているなんて、そんなの無理よ。そうでしょう、アニマさん？　だからあたくしは悪くないんです。だからあたくしは……、ここやめたい！

車椅子を押して立ち去る。
一匹の濡れたケモノが大地を走る。

女　あなた、ここよ。あたしは、ここ……。助けてちょうだい、あなた……。あたしを助けて。あなた……。

震えて呻き、穴のなかに身を躍らせた。
つづいて二匹のケモノが入ってくる。

老　人　見たか、埴生くん。
若い男　はい、確かに……。
老　人　いまのはあれです。
若い男　あれです……。
老　人　ケモノです。ケモノが病院の中庭を走った、さっと走った。
若い男　いえ、お魚です。お魚がパチャンと水に跳ねたんです。
老　人　バアチャン？
若い男　ええ……。
老　人　目をつむってごらん、埴生くん。
若い男　目ですか？
老　人　いいから瞑ってごらん。
若い男　……。（瞑る）
老　人　（すばやく石を拾って股間に挟む）触っていいよ。
若い男　なんでしょう？
老　人　いいから触ってごらん。（男の手をとり股間に触れさせる）
若い男　……？
老　人　あるだろう、埴生くん。立派にあるよね。
若い男　これ……。
老　人　キンタマです、わたしの……。

若い男　キンタマ？
老　人　はい、キンタマです。どうだろう、わたしの……？
若い男　やや硬めです。
老　人　君のはあれですか。
若い男　ちょっと軟らかめです。
老　人　ちょっと触っていい？
若い男　いいですよ。
老　人　(触れて)こんなトモダチが欲しかった……。
若い男　どんなあれですか？
老　人　やさしい気分です。埴生くんは？
若い男　わが身が解かれる。解かれて銀のウロコになる……、そんなあんなです。
老　人　こんなは？
若い男　……！(悲鳴)
老　人　ちぎるぞ、小僧。もう一度お婆ちゃんだなんて言ってみろ。てめえのキンタマなんかんか引きちぎってあれだ、金魚の餌にしてやる。
若い男　ちぎってください。ちぎれるものならばちぎって欲しい、こんなもの！
老　人　埴生くん。
若い男　さあ！
老　人　その……。
若い男　……。(頑な沈黙にはいっていく。)
男　　あや……！(と飛びこんできて)堀口さん、ぼくの家内を見かけませんでしたか。
老　人　……。
男　　埴生くん。
老　人　あっち行ってろ。殺すぞ、殺す……。
男　　あや……！(走り去る)
老　人　埴生くん、あした特別外出許可証をもらいなさい、ね？　そうしてあれです、お家に帰ってくるんです。帰って、その……、おかあさんに会ってくるんです。いや、喋らなくていい。喋らなくて、ただ黙っておかあさんの顔をみて、できれば家を出るときにたったひと声、おかあさん、行ってくるよ……。たったそれだけでいいんだよ、ね？　むつかしいことじゃないだろう？　おかあさん、行ってくるよ。それで、その……、とり返しがつくわけじゃないけど少なくともあれだ、君もおかあさんも身の置きどころが変わる。そう思うんだよ。そうだよ、あれなんだから……、そんなことは誰にだってあることで、べつに恥じることじゃないんだから。わたしにだってあった。その……、おふくろとあれじゃないんだが、後楽園のリングに上るといつもみなさんの声が聴こえるだろう。ワッショイワッショイ……。そんな時はあれだ、パンチを繰りだすたびに俺はいま乱交してる、みなさんと乱交してる……。ね、わかるよね？
若い男　……。
老　人　だから、その……、あれだよ。わたしは旅に出てもいいと思っている。君とおかあさんとわたしの三人で、みなさんのところへ……。あれだからね、みなさんのいるところじゃおかあさんだってみなさんだからね。ある。きっとこの病院のどこかにあるよ、

みなさんに通じる蛇口が……、ね？　その蛇口をひねって、埴生くん、ユーフラテスの川を遡ろう。だから、その……、もう一度話してくれ、うおの伝説を……、埴生くん……。

酔っぱらいの中年男がフラリと入ってくる。

中年男　奥さん、元気？
老　人　……？
中年男　奥さん、ほら、今月ぶんの金持ってきたよ。
老　人　あっち行ってろ。
中年男　いいじゃねえか、奥さん。金持ってきたんだからおまんこくらいやらせろよ。（さっと抱きしめる）
老　人　はは、なに言ってんだ？（動けない）
中年男　奥さん、肥ったね。いい尻してやがらあ。
老　人　埴生くん、なに言ってるんだろうね、こいつ……。
若い男　……。
中年男　俺は淋しいんだよ。わかるだろう、奥さん？　その……、女房や子供に逃げられちまってね。もうずいぶんになる。30年……、そうだ、まる30年も経っちまいやがったな。覚えてるだろう、奥さん。あれはよ、たしか昭和25年の10月だった。馬入川の鉄橋で俺は奥さんのご主人をはね殺しちまった。が、俺はちっとも悪かねえんだ。あんたのご主人がフラッと飛びこんできたんだからね、酒飲んでてよ。ヤクもやってたって言うじゃねえか。ふん、俺にはカーブ切る間もねえや。いや、カーブ切っちまったな、人生の……。相手が悪かったよ、落ちめとはいえ天下のピストン堀口だ。そうだろう、奥さん。
老　人　俺はおかずじゃない……。
中年男　そうさ、奥さん。それから間もなくあれだ、奥さんがこの病院にいることを俺は知った。で、俺は一生奥さんの治療費を払いつづけようと思った。国鉄をやめ、ニコヨンから借金の取り立て、ヤクの運び屋に競馬のノミ屋……、金になることならなんだってやった。タバコも酒もやめた。いまじゃ家賃もバカにならんから地下鉄の隅っこで新聞紙にくるまって眠ってる。なにもそこまでおまえがやることはねえ。世間のやつらはそう言ってくれる。だが……、俺は毎月金をもってきた、毎月欠かさずに払いつづけてきた。30年……、30年だぜ、奥さんよお。
老　人　俺はおかずじゃない……。
中年男　それができたのはあれだ、奥さん、俺がピストン堀口のファンだったからだよ。あいつのコブシが俺に夢をみせてくれたからだよ。その堀口を俺は轢いちまった。だから俺は払いつづけてきた。夢のツケが回ってきたんだ……、そう思って俺は払いつづけてきた。それなのに奥さん、あんたはこんな餓鬼といちゃついてる。
老　人　俺は生きてる。
中年男　そう言っていちゃついてる。いちゃいちゃしてあれだ、俺が払いつづけてきたツケをぜんぶ帳消しにしようとしている。わかるかい、奥さん？　わかるだろう？　だから

奥さん、俺にもおまんこさせろよ。（シャツをひきちぎった）

老　人　……！（なんと乳房が零れてしまう）

中年男　ひひひ……。

老　人　みなさん、助けてください。みなさん……。

中年男　ここにいるよ、奥さん。みなさんはここ……、俺だよ。夢のツケを払いつづけてきたこの俺だよ！

老　人　ひっ……。（逃れようとする）

中年男　どうだ、奥さん。痛いだろう、頭がギンギンするだろう。あんた、こうやって埴生くんにあれしたんだよ。さあ、堀口さん、向こうで草をむしろう。草むしって忘れよう。草がないからおまんこで忘れよう……！

中年男が医師であるのは言うまでもない。

男と看護婦が飛びこんでくる。

男　　あやっ……。

改めて用水池に気づき、物干し竿で底をまさぐり始める。

看護婦　先生。先生のバカ！（医師の尻をひっ叩く）

医　師　おまんこ……。

老　人　……。（這って逃げた）

看護婦　使用してください、あたくしので良ければ使用してください。（お尻を突きだす）

医　師　う、臭い……。

看護婦　うっ。（と泣き）あたくし、田舎に帰りたい。

医　師　あら？　わたしはここでなにしてるんだろう？　あ、らら？　埴生くん、君はここでなにしてるんです？

若い男　……。

医　師　ね、芹さん、あなたそこで……。

男　　わたしに話しかけるんじゃない！

医　師　……？

看護婦　参りましょう、先生。ええ、あちらに用意してありますよ。あれです、お好きなキャベツが……。

医　師　……。（突然無意味な笑いを発する）

看護婦、医師を拉致する。

物干し竿で池を深くまさぐり、呻くように。

男　　あや……。許してくれ、ぼくが悪かったよ。許してくれ……。

若い男　（地底から呻くように）おかあさあああん……。

穴の中からぐっしょりと濡れた女が這い上がってくる。
鬼面で顔を覆っている。若い男は怯えて消える。
女、一糸乱れずに正座する。

男　あや。
女　……。
男　ここにいるよ、あや。ぼくはここにいるからね。
女　……。
男　どうしたんだい、あや。そんなに濡れて……。
女　……。
男　どこに行っていたんだ。
女　……。
男　なにか言ってくれ。
女　……。
男　あや。
女　そばに来ないで！
男　……。

女がゆっくりと面を外す。怪しい眼。静かに。

女　それから、あたしのことをあや、そう狎れなれしく呼ばないでください。あやさん、そう呼んでください。あたしもあなたのことをあなたとは言いません。ケイジさん、そう言います。きょうからはそういうふうにして下さい。
男　（正座して）わかりました……。
女　あたし、死のうと思いました。それで病院の塀をぬけて荒川の川に入りました。けど、死ぬことは叶いませんでした。カンナやサンゴのことを想うと、どうしても死にきれませんでした。あたしの手足が急にバタバタしてしまうのです。
男　どうしてそんなバカなことを考えるんだ、死のうだなんて……。
女　バカ？（翳る）
男　いや。バカはとり消します。
女　あたしがバカならばケイジさんはなんなのです。大嘘つきのスケベじゃありませんか。
男　その……、ぼくがあやさんになにか嘘をつきましたか。
女　あいつは何なのです。
男　あいつって、誰のことですか。
女　あいつとは切れたのではないのですか。
男　はい、切れました。
女　切れたと言いながら、なぜあいつに逢っているのです。
男　逢ってはいません。
女　なぜシラを切るの？
男　逢わないから逢わない、そう言うのです。

女　あたしは見ちゃったんですよ。
男　なにをです。
女　現場に決まってるでしょう。
男　なんの現場ですか。
女　濡れ場よ……！　ああ、くちが穢れて今夜もご飯がまずいわあ。（面で顔を隠す）
男　その……、あれです、娯楽室にいたのはあいつじゃないんです。どこかあいつに似てはいるけどあいつじゃない。だからつまり、濡れ衣なんです。
女　濡れた憶えがないと言うの。（面を外す）
男　はい。
女　だったらあれはなんだったの？　あたしが富士見荘で見たあのおフトンは？　睦みあうあの裸は……？　です。
男　その……、あの時はあれです。濡れてしまいました。
女　あの時だけでしょうか。
男　違い……、ます。
女　あいつとはいったい何回濡れたのです。
男　それは……。
女　さあ、正直に言いなさい。
男　だから、それはです、以前にも告白したつもりですが……。
女　以前はいいんです。以前は以前、きょうはきょうですから。
男　30数回です……。
女　数回ではぼんやりしてわかりません。
男　８回です。
女　30でしょう？
男　はい……、38回です。
女　38は今年の数字でしょう。
男　今年です……。
女　去年は何回ですか。
男　１６２回だったと思います……。
女　一昨年は？
男　１３２回です……。
女　全部で何回？　この三年間にあいつとは何回濡れましたか。
男　だから……。
女　何回濡れたかです、シッポリ濡れたかです。
男　足して貰えばわかる……。
女　いまのあたしにそんな余裕があると思うのか！（と激怒する）
男　……。
女　さあ、はやく答えなさい。
男　……。
女　なにしてるの、ケイジ。（男の髪をつかむ）
男　いま計算してるんじゃないか……！

女　……。（不意にぼんやりと立つ）
男　おい、どこへ行くんだ。
女　荒川です。子供たちを頼みます……。（頭を下げる）
男　ちょっと待ってください。
女　（ヒステリックに）３３２回だよ、ケイジ。おまえはこの三年間にあいつと３３２回。あたしとは56回、たったの56回……！　あたしはまだ36歳なのよ。36歳というとあれよ、人生でいちばんしたい年頃なのよ。でも、あたしはおまえにおねだりしたことがあるか？　いっぺんでもあったか。
男　すまなかった……。
女　お仕事でおまえは疲れている、お仕事でおまえは疲れている……、あたしはそう思っていた。だから我慢をしたわ。からだが火照って眠れない晩は我慢をしたわ。あたし、こうやって我慢をしたわ……。（自分の腕を強く咬む）
男　よさないか。
女　触らないで！
男　……。
女　ケイジさんはもうあれなんです、あやのからだには興味を失ったのです。荒川に消えます……。
男　死なないでください。
女　死にます。
男　死ぬのはあれです、いつでもできる……。だから、その、もうすこしぼくと話しあってからでも遅くはないと思います。
女　（男のネクタイを見て）それはなあに？
男　ええ、いま着替えます。わが家の制服に着替えます。八城さん……！
看護婦　わかってます。

と、男のパジャマを手に現れる。着替えながら。

男　ぼ、ぼくはあれだ……、改心したんだ。そうでしょう、あやさん。改心して、その……、努力をしている。できる限り、パジャマの時間をもとうと心がけている……。それはあれです、ぼくの努力はまだまだ至らないかもしれない。しかしです、あやさん、こっちを見て欲しいんです。その……、あなたがインキ壺を投げた日からこっちを見て欲しい。そうすればわかるはずです。つまり、あれです……、ぼくはいまも十分にあやさんのからだに関心を保っている……。
看護婦　がんばってください、芹さん。わたくしはあなたにあれなんです、是非ともがんばって欲しいんです。あなたががんばれないとわたくしもとてもです、とてもがんばり切れません。だからがんばってください、芹さん。芹さん、がんばれえっ……。
男　あっち行ってろ！
看護婦　ほんとうにがんばってくださいね。

と、涙ながらに走り去った。

女の目はまだネクタイに吸い寄せられている。
男、気づいてネクタイをそろりと引き寄せようとする。
と、女がすばやくそのネクタイを掴んだ。

女　あいつからのプレゼントだろう。
男　そう……、だったかな。
女　あたしはこんな下品なネクタイは買いません。
男　その……、処分します。
女　いつです。
男　え？
女　いつ買ってもらったんです。
男　……。
女　言いなさい。
男　去年です……。
女　去年のいつ？
男　忘れました……。
女　いつなんです。
男　七月です……。
女　七月のいつ？
男　日曜日……。
女　何週目の日曜日？
男　三週めです……。
女　21日ですね。
男　……。
女　21日です。7月の21日。あの日は子供たちを上野動物園に連れていく約束だったでしょう。
男　ごめんなさい。
女　ケイジはなにを買ってあげたの？
男　買ってあげません。
女　買ったでしょう！
男　はい……。
女　そうよ。お礼になにか買ってあげる。それがあれだもの、ケイジの階級的弱点だもの。そうでしょう。
男　……。
女　なにを買ったんです。
男　……。（耐えられない）
女　あいつになにをです。
男　七色パンティです。
女　色を言いなさい。
男　え……？

女　その色を言ってごらんよ、嘘つき。取っかえ引っかえあいつに穿かせてみた色です。
男　白に、ブルーに、黒、黄色、薄紫……。
女　ピンクもあったろう。
男　ピンクもありました……！（自分で自分に刺々しくなっている）
女　あたしは白だけです。この10年間に白だけ。あたしだって色とりどりのパンティを穿いてみたい……。晴れてたのか。
男　なにが？
女　お空です。まっ青だったんでしょう。
男　晴れていました。
女　で、おまえは子供たちとの約束をすっぽかして、箱根の温泉にでも行ったんだろう。
男　箱根の件はもう言いました。
女　パンティのことは言わなかったじゃないか。
男　そうですか。
女　聞いてないわよ。
男　忘れていた。ごめんなさい……！（頭を地面にこすりつける）
女　ほかにない。
男　ない……。
女　ほんとうにない？
男　ありません。
女　断言できる？
男　はい。
女　どうやって断言できるのよ！
男　……。
女　荒川はどっちかしら……？（立つ）
男　あやっ。
女　あたしはなあに？　ケイジのなによ！（叫ぶ）
男　妻です……。
女　あたしは妻？
男　ぼくの妻です。
女　なにかしてくれた？
男　……。
女　おい、あたしになにか妻らしいことをしてくれたのか。子供たちにもなにかしてくれたのか。お隣りの金子さんちのベランダを見てごらんなさい。物干し台にはいつも奥さんのピンクのパンティが干してあります。あたしもあれなんです、一度でいいから物干し台にピンクのパンティを干してみたくてたまりません。干して……、金子さんの奥さんと買物帰りに出会ったら、ちょっと含羞んでみたい。わざとです、わざと含羞む……。それだけであたしは救われるんです。いまよりは救われます。けど、あたしのパンティは白ばかりだから、パンティはいつも家のなかに干さなければならないんです。
男　（ヤケ気味に）自分で買えばいいだろう。

女　そんなの意味があるか、おまえが買ってくれたんでなくちゃ……！　パンティだけじゃないわ。金子さんちは日曜日がくると家族そろってあちこち出歩きます。お隣りに鍵をあずけて出かけます。それを見てサンゴやカンナが……、金子さんちどこいくの、おかあさん？　金子さんちどこいくの、おかあさん……？　子供たちもあたしも、家庭のダンランがしたくてしたくてたまりません。いっぺんで良いからお隣りに声かけて、鍵をあずけて出かけてみたいんです。おまえはいっぺんでもそんなことをしてくれたか。おい、卑怯者！

男　いっぺん、あると思う……。

女　いつ？

男　四年前、伊豆の石廊岬に……。

女　いっぺん！　結婚してからたったのいっぺん。それもあれだわ、おまえが熱をだして二泊を一泊にきりあげて帰ってきた……。そうだろう、卑怯者。

男　はい……。

女　おまえはそうだろう、卑怯者だろう！

男　卑怯者です……。

女　卑怯者よ。

男　卑怯者だよ……。

女　そうよ、卑怯者め。

男　俺は卑怯者だあ……！

と叫んで自分の額を地面に烈しく打ちすえる。

女は妙に醒めて。

女　みてごらんよ。タマが死んだ時もおまえはいなかったわ。だから、あれだわ……、子供たちとあたしでこのお墓を建てたわ。初めてお墓を建てたわ。この壁をクリーム色に塗りかえたのもあたし……。下駄箱を作ったのも、台所のこの棚を作りかえたのもあたし……。(坐って)そうしてここで三度三度の食事を拵えたわ。子供たちの洗濯も、繕いものもした。それから、それから……、あなたが帰ってこない時はここでこうやって待った。何日も何日もただ坐りつづけた、動きもしないで……。お腹がすいたってベソをかいている子供たちを叱ったこともある……。ね？　ほら、染みてるわ。ほら、あたしの血が染みてる。真っ黒になって染みついている……。(裾で必死にこすり落とそうとする)

女　……。

男　あたし、ここでいつも故郷の島のことを想ったわ。島へ帰りたい……、そう思ったわ。島には知っている人がたくさんいるわ。淋しかったらいつでも会えるわ。知っているところもたくさんある。川や、港や、林や、丘や……。お店だっていつでも行けるわ。ここじゃだめだわ、この街じゃ……、八百屋さんにも行けないわ。お風呂屋さんにもクリーニング屋さんにも……。(からだが拒絶反応で震えてくる)みんながあたしを見るわ。あたしを見てうわさをしているわ。ほら、あの人ですよ、旦那さんの帰ってこない家は……。ほら、あの人ですよ、旦那さんに抱いてもらえないのは。あの人です

よ、飼っていた猫を金槌で殴り殺したのは。あの人ですよ、ほら、あの人ですよあの人ですよあの人ですよ……。（錯乱している）ケイジ、どこ……？　どこなの、ケイジ？　ケイジっ……！　行っちゃったのね……。ケイジ、行っちゃったわ。とうとう行っちゃった……。

男　あや……。（強く抱きしめる）

女　ケイジ？　あなた、ケイジ……？

男　ぼくだよ。

女　帰ってきたんですね。

男　うん。帰ってきたんだ。

女　あたしが泣いているのが聴こえたんですね。

男　聴こえたよ、あや。泣いていたんだろう。ケイジ、ケイジ……。おまえはここで犬のように泣いていたんだろう。聴こえたよ、あや。ぐさっと聴こえたよ。

女　恐い……。あたし、恐い……。（縋りつく）

男　もう大丈夫だよ、おまえ。あれだからね……、ぼくは帰ってきたんだからね。

女　帰ってきたんですよね。

男　帰ってきたんだ。

女　どこに……？

男　え……？（離れる）

女　どこに帰ってきたんです。

男　家庭です……。

女　家庭のどこなんです。

男　おまえのそばです……。

女　おまえじゃないだろう？

男　はい。あやさんのそばです……。

女　そばじゃわからない。

男　……。

女　さあ、言いなさい。あたしのどこに帰ってきたんです。

男　だから……。

女　接続詞はいらないわ。あたしのどこに帰ってきたんです。

男　はい……。

女　さあ、言いなさい。ストレート一本槍で言いなさい。そばじゃわからないわ。わたしはソバ屋じゃないのよ。おまえなんかにツルツル呑みこまれてたまるもんですか。

男　言います。

女　言うか。

男　はい。

女　言ってみろ。

男　あやさんの心です……。

女　ゲッ、あたしの心がわかったのか？

男　はい。

女　あたしの心がわかって、あたしの心へ帰ってきたのか。

男　そうです。
女　嘘つき！
男　嘘だと言うんですか。
女　あやにはあやの心がわからない。あやにはわからないのに、おまえにはわかるのか。だったらあやの心を見せてくれ。
男　どうやればいいんです。
女　自分で考えろ。おまえは大学の先生だろう。
男　はい……。
女　だったらあやの心をみせろ。いまここにすぐ見せろ。だったら……？　ああ、接続詞を二回も使ってしまったわ……。（と立ちあがった）
男　あや……。
女　（妙にさっぱりして）あたし、やはり死にます。
男　どうあっても死にますか。
女　あたし、接続詞を二回も使ったんです。五秒間に二回も……。それはあれです、あたしとあなたのカンケイにはまだ接続詞が必要だということなんです。あたなはまだどこにも帰っていないということなんです。あたし、死にます。
男　死ぬか……。
女　死にます。
男　ぼくも死ぬ。あれだからね、おまえに接続詞を使わせたのはぼくだからね。しかしぼくは……。
女　なんです。
男　その……、会話には接続詞はあっていいと思う。
女　思想の違いだわ。
男　思想が違うとあれか、相思相愛はムリか。
女　その結果がここにあります。
男　わかった、ぼくだけ死のう。
女　あたしが死にます。あなたはあれです、生きて子供たちの面倒を見ていただかないと困ります。
男　ぼくには自信がない。そうだろう？　ぼくはあれだ、一生懸命に努力をしてきた。女とは別れた、パジャマは着ている、嘘もつかない。なのにおまえは少しも許してくれない、許そうとしない。過去だけをほじくって責める。しかし、その……、ぼくはスーパーマンじゃない。過去の過ちを過去にさかのぼって正すことはできない。死ぬよりない。
女　あたしにはあなたの死に水はとれません。お先に死にます。
男　ぼくだけ死ねばいいだろう。
女　あたしが死にます。
男　ぼくが死ぬ。
女　あたしです。
男　ぼくだ。
女　あたしです。

男　ぼくっ。
女　そうですか。
男　そう……、だ？
女　だったらあれですから、あなたはそっちで死んでください。あたしはこっちで死にますから。（移動する）
男　よかろう……。（移動する）
女　……。（両手を自分の首にあてがう）
男　（ネクタイを自分の首に巻きつける）おい……。
女　なんですか……。
男　これも思想の違いか。
女　そうです……。
男　そうか。
女　へい……。
男　……。
女　おい。
男　なんだ……。
女　あれか。
男　あれだ……。
女　スッキリ死ねそうか。
男　ああっ……。
女　だったらはやく死ね。あたしはスッキリしない。ここで犬死したらあいつに負けたことになる。あたしは死なない、おまえは死ね。
男　死ぬ……。
女　死にたいんだろう？
男　死にたい……。
女　死んでいいよ。
男　……。（手が震えている）
女　どうした、おい、卑怯者。
男　……。
女　命が惜しいんだろう。
男　……。
女　あいつにまだ未練があるんだろう。
男　……。
女　嘘つき！　卑怯者！
男　……。（手に力がこもる）
女　（ヒステリックに）死ね。ハハハハッ……、死ね！　死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ねいっ！　ヒヒヒヒヒヒッ……！
男　……。（顔面が鬱血してくる）

女の笑いは昂じて泣きになり、震えに襲われる。

女　あなた……。
男　俺に触るな！
女　やめて、お願い……。
男　……。（血の気がうせていく）
女　ごめんなさい、あなた。あたしがいけなかったんです。あたしが……、ごめんなさい、あなた、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……。
男　（手が緩んで）あや……。
女　あなた……。
男　あや……、あやあやあや……！

かれらはしっかりと抱きあって泣く、子供のように。
と、そこへ若い女が車椅子にのって現れる。

女　あなた、あいつが来たわ。
男　あいつって……？
女　あいつです、接続詞です。
若い女　……。
女　なにをしに来たの？
若い女　あたしのハイヒールを返して欲しいんです。
男　さっきお返ししたはずです……。
若い女　もう片方です。もう片方がないとあたし片輪です。一生片輪です。
男　知りません。その、ぼくが拾ったのはそれだけで……。
若い女　知っているんです。知ってて先生は隠しているんです。
男　なぜぼくがあれなんです、あなたの靴を隠さなければいけないんですか。
若い女　囲っておきたいんです。先生は一生、あの富士見荘にあたしを囲っておきたい……。
女　追っぱらって、ケイジ！　あいつを追っぱらうのよ。あれだわ、あいつはあたしの気違いぶりを笑いにきたんだわ。ちきしょう……！
男　あの人はあいつじゃないんだよ。
女　あいつだよ、おまえのアニマだよ。
男　アニマじゃない。
若い女　アニマです。あたし、先生のアニマです……。
男　アニマじゃない！
若い女　アニマです……。
女　アニマよ！
男　……？
若い女　さあ、あたしのハイヒールを返してください……。
女　……。（男の手を掴んで自分のスカートの奥に潜らせた）
男　……？
女　ケイジ、あたしがほんとうに好きか。
男　好きだ……。

女　あいつは好きか嫌いか。
男　嫌いだ……。
女　殴れ。
男　しかし……。
女　接続詞はいらん。
若い女　あたしのハイヒールを……。（近づく）
女　殴れ、ケイジ。殴れ！
男　……。（仕方なく若い女を殴る）
女　力が足りんっ。
若い女　いいんです、先生。あたしはちっとも痛かないんです。だって、あたしは先生のアニマですもの。
男　アニマじゃない！（烈しく殴った）
女　そんなんであたしの気違いが癒るか……！（女を車椅子からひきずり落とす）
若い女　……。（悲鳴）
女　生きて帰れると思うなよ、他人の家庭をメチャメチャにしておいて。ちきしょう。
若い女　人殺しいいい……！
男　あやっ。
女　おまえはまだこの女が可愛いのか。
若い女　先生、助けてください……。
男　その人はね、アニマじゃないんだよ。
女　おまえのアニマだよ。
男　アニマは死んだんだ。
女　アニマよ！
男　……。（からだが震えている）
女　あたしは見たわ。そうよ。そのお面を被ったらはっきり見えたわ。こいつはアニマだわ。見るといいわ、あなたもそのお面を被ってみるといいわ。こいつの正体がわかるわ、はっきりわかるわ。さあ、あなた……。
男　せ、背中が……。
女　癒らないわ。その痒みはキンカンくらいじゃ癒らないわ。
男　ひっ……。
女　さあ、あなた。さあ、さあさあさあっ……！

男、鬼面を拾い、被った。

女　ほら、見えるでしょう、あなた。そいつよ、その影よ。その影があたしたちの間に潜りこんでいるのよ。追っぱらって、あなた。さあ、その影を追っぱらってちょうだい。
男　……。
若い女　せんせえっ……。（片足をひきずりながら男に近づく）
男　わたしに近づくんじゃない、アニマ！
若い女　靴を返してくださあああい……。

男　わたしは靴じゃない。
若い女　靴を返してくださあああい……。
男　わたしがおまえに穿かれてたまるか。
若い女　甲府に帰りたいんです……。
男　わたしはぼくだ。男だ！
若い女　片輪では帰れません……。
男　来るな、わたし。
若い女　靴を返してくださあああい……。
男　アニマ……！（両手がスッと女の首に伸びた）
若い女　……。
女　そうよ、あなた。そんなやつに負けちゃだめっ。戦うのよ、戦うの。男だもの、あなたはこの世でいちばん男らしい男だもの……。埋めちゃいましょうね、あなた。そんなやつ、土のなかに……、うんと深い地の底へ埋めちゃいましょうね。

女、スコップで阿修羅のごとく土を掘る。
男はむしろ静謐、透明でさえあるかもしれない。

男　アニマ、わたしのアニマ……、こうしたものをいったい何と呼ぼう？　わたしの腕を襲う、痺れるようなこの力をいったい何と呼ぼう？　わたしにはそれがわからない……。板橋区上板橋2の19の2……。二人して眺めた一筆の山形がわたしの富士なのか？　遣水の山荘から林に見透かした、あの六月の峰がわたしの富士なのか？　それさえもわからない……。おまえがほんとうにわたしのアニマなのか、わたしがアニマのわたしであるに過ぎないのか？　それさえもわからない。しかし、あの日……、わたしは影をひきずる女を見た。ざらつくコンクリの地肌に影をひきずる女を見た……。風が吹いていた。あっちからこっちへ……、行きかう人びとの肩にすがって渡っていた。女は、その人びとの肩にこづかれて行き場を失っていた。その影だけがふるえていた。ちぎれたトカゲの尻尾のようにふるえていた……。影をひきずるあの女が誰であったのか、いまは定かでない。わたしのあやであったのかも知れない。わたしのアニマであったのかも知れない。アニマのわたしであったのかも……。アニマ、わたしのアニマ……、こうしたものをいったい何と呼ぼう？　わたしがわたしであることを選ばせてしまうこの力を……。似ている、どこか……。深夜の病室、ひとり机に向かってきょうの出来事を正確に、ただひたすら正確に綴っていく日記に……、あの鉛筆の芯の力に似ている。アニマっ……！

若い女は男の両手のなかで息絶えた。

女　（不乱に）まっ黒だわ、あなた。まっ黒な穴が掘れたわ。
男　……。
女　なにをしてるの、あなた。さあ、埋めるのよ、そいつを。はやくここに埋めるの。

男、若い女の死体を穴にひきずっていく。

女　ここならば大丈夫よ。心配はいらないわ、誰にも見つからないわ。だってまっ黒なんだもの。掘っても掘ってもまっ黒なんだもの。ね、そうでしょう、あなた？　それに、ほら、よく言うじゃない……、豆腐は豆腐のなかに隠せって！

男　……。

女　さ、そっちを持って……。ちきしょう、足がはいらないわ。面倒だからへし折りましょうね。なんてことないわよ、足の一本や二本……。（ペキと鈍い音がする）まあ、簡単ね。簡単だったわ。今度は土を被せましょう……。いいえ、大丈夫……、大丈夫よ。誰にも見つかるものか、ちきしょう……。

男　……。

女　あなた。

男　なんだ？

女　靴。ほら、あんな所にあいつの靴を忘れてるじゃない。

男　……。（拾いに行く）

女　はやくこっちを手伝ってちょうだい。

男、鬼面を外そうとするが外れない。

女　なにをしてるのよ、あなた？（と男のほうを振り返り）あああああ……！

男　どうしたんだ、あや……？

女　なによ、あなた？　その背中はなあに？

男　ぼくの背中がどうかしたのか……。

と女を振り返る。
この時はじめて男の背中が客席をむくのだが、
パジャマの背が破けてそこには銀のウロコがびっしり。
ギラッ、ギラッと乱反射する。

女　いいえ、なんでもないんです。なんでもないんですよ、あなた……。

男　……。（面が外れない）

女　ごめんなさい、あなた……。あたしがいけなかったわ、ごめんなさい……。（泣いている）

男　手伝ってくれ、あや。こいつが外れないんだ。

女　どうなさったの？

男　こいつが……。

女　ええ……。ごめんなさい、あなた、外してあげます。あたしが外してあげます……、あなた……。

二人は面を外しにかかる。

カミソリをもった老人、つづいて看護婦が飛びこんでくる。

老　人　埴生くん……？
看護婦　それを寄越しなさい。
老　人　埴生くん……？
看護婦　堀口さん。
老　人　埴生くんを連れてこい、ここに連れてこい。
看護婦　だからあれです、それを寄越したら連れてきます。
老　人　騙されるものか。埴生くん……？
医　師　埴生くんはここですよ。

と若い男を連れてやってくる。
自らそうしたのだろうか、
若い男のからだは無数の赤い毛糸によってぐるぐるに編まれている。

老　人　埴生くん。
若い男　……。
医　師　さあ、堀口さんのところへ行ってあげなさい。
看護婦　だめよ！
医　師　見ているんです、八城くん。君はただ黙って見ていてあげるんです。それが治療というものです。わたしたちにできるたったひとつの治療というものです。
看護婦　なにを言ってるの、河合さん。あの二人をとめなさい。とめないと隔離病棟に……。
医　師　（その口を塞ぎ）さ、埴生くん。
若い男　……。（近づく）
老　人　触ってくれ、埴生くん。もう一度わたしのキンタマに触ってくれ。
若い男　……（手を伸ばす）
老　人　ありがとう、埴生くん。君のも触っていいかい……。（手を伸ばす）
若い男　……。
老　人　ああ、なんて素晴らしいんだろう……。行こう、埴生くん。わたしはあれだ。見つけた、とうとう見つけたよ。その……、あの日のみなさんに通じる蛇口をね。聴こえるんだ、シュシュポポシュシュポポ……。この蛇口から聴こえるんだよ、みなさんの声が……。行こう、埴生くん。この蛇口をひねって、ユーフラテスの川を遡ろう。70歳のピストン堀口と、お手々つないで……！（カミソリで自分の手首をスイと切った）
看護婦　堀口さん！
若い男　……。
老　人　埴生くん……。（ヘラヘラと笑っている）
看護婦　手を貸してください、芹さん。
女　　この人を見ないで！
看護婦　芹さん。
女　　後生だから見ないで！

男　……。
看護婦　だれ？　あなた、誰なの？
男　ぼくです、看護婦さん。
看護婦　違う。芹さんじゃない。あなた芹さんじゃないわ……！

不幸にも彼女は男の貌を覗いてしまったのである。
ゆっくりと貌をあげながら。

男　ああ、なんていいお天気だろう……。

そこには皮膚を鬼面とともにひっぺがされた真紅の貌がある。

女　あなた……。

看護婦は老人を連れ去り、医師は病院の屋根にのぼる。

医師　さあ、みなさん、治療を続けましょう。わたしが……、わたしだけはいつも見ていてあげます。ある時はニセの気違いを装って、そうしてまたある時は巨大な翼を天にひろげて見ていてあげます。わたしを信じなさい。わたしはカラスなのです。あなたがたの白いカラス。あの丘から帰ってきた白いカラスなのです……。
看護婦　降りなさい、河合さん。降りるんですよ……！

看護婦、今度は医師を追っかけていく。

男　さあ、出かけよう、あや。
女　ええ、あなた、帰りましょう……。
男　お弁当の用意はいいか。
女　食べきれないくらい拵えましたよ。
男　魔法瓶は？
女　象印にいっぱい……。
男　お隣りに鍵は預けたろうね。
女　はい。預けましたよ、あなた……。
男　奥さん、なにか言ってたか。
女　あたしは奥さんちがうらやましい……、そう言ってましたよ。
男　そうか。
女　あなた……。
男　バカ、泣くやつがあるか。
女　ごめんなさい……。
男　おぶってやろう。
女　でも……。

男　なに、恥ずかしがることがあるもんか。さあ……。（女を背負う）
女　おとうさん……。
男　なんだ。
女　あたし、肥っちゃった……。
男　へっちゃらだよ。子供たちは……？
女　あそこですよ、おとうさん。あの子たち、ほら、あそこであたしたちが来るのを待っているじゃありませんか。
男　（遠くへ）おおい。サンゴおおお……。カンナあああ……。

女をおぶってゆっくりと用水池のほうへ歩いていく。
若い男、土のなかからもう片方の白いハイヒールを拾いあげた。
ゆっくりと口をひらく。

若い男　それはとてもとても良いお天気の午後のことでした。ふたりの男と女が、ユーフラテスの川ぞいを歩いておりました。女の名を愛の女神アフロディティといいました。男はアフロディティの子で、その名をエロースといいました。ふたりが楽しそうに語らい、歩いておりますと、急にお陽さまがかげって怪物のティフォーンがあらわれました。ふたりはびっくりして川のなかへ飛びこむと、銀のお魚になって逃げました。いいえ……、ふたりはお魚になって、いまもユーフラテスの川のなかを泳いでいるのです。水に抱かれてゆったりと泳いでいるのです……。

女を背負ったまま男は用水池に入水する。

女　素敵ですよ、おとうさん……。
男　サンゴやカンナはどこに行ったんだろう？　堀切のショウブ園はこっちだっていうのに……。
女　あそこで待っているじゃありませんか。
男　おおおい。サンゴおおお……。カンナあああ……。
女　ええ。あそこです、おとうさん。あの子たちは、ほら……、石廊崎の海の底であたしたちがくるのを待っているんです……。（泣いている）
男　おとうさんだぞおおお。おとうさんが帰ってきたぞおお……。
女　あなた……。
男　あや……。
女　あたし、嬉しい……。（両手が男の首に伸びる）
男　サンゴゴお……。カンナあ……。

ふたり、ゆっくりと池の底に沈んでいく。
若い男、土になにか掘りあてる。
と、一条の水がググッと天を突いた。

※初稿脱　一九八〇年三月
※底本　深夜叢書刊「うお傳説・漂流家族」昭和五十七年二月一日発行
※決定稿　二〇一三年六月十日校訂
※引用　別役実・著「象」
※参考文献　事件当時の新聞、週刊誌等。
※備考　この作品は島尾敏雄・著「死の棘」に着想を得ています。